

## 公儀触伝達にみる徳川領国と国持外様領国の構造

―京都、山城・丹波・丹後国と因幡・伯耆国の比較から―

山田 洋 一

はじめに

本稿は、筆者が近世社会の枠組みを構成するものと考えている「徳川領国」、「国持外様領国」（両領国）について、公儀触の伝達から構造（制度組織やあり方など）を分析し、比較検討を行って、実態をさらに明らかにするものである。この両領国の枠組みは、従来のいわゆる幕藩体制<sup>(1)</sup>とは異なる近世社会の分析視角になるものと考えている。

まずこれまで分析してきた両領国の説明から始めたい。

徳川領国は、親藩、譜代藩、旗本の領地、幕府の直轄領に加えて、家臣化した譜代並等の小中外様藩領、その他朝廷・寺社関係の領地を含む、徳川家を主とする約二、一〇〇万石の領国である。その内部構造は、水本邦彦氏の所論<sup>(2)</sup>による縦の、奉行、領主、村、村連合の四層からなり、度合いはあるが領主権限の「行政」と「所有」が奉行と村・村連合とに分離しているというものである。

国持外様領国はこの徳川領国に對置するもので、笠谷和比古氏の論考<sup>(3)</sup>に基づいている。国、郡を一円規模に領する国持大名の鳥取池田家、金沢前田家など一九家（藤堂家、宗家は除く）とその分家の各家領

国からなる合計約一、〇〇〇万石の領国地帯というべきものである。各家領国は独立し、その内部構造は、地方知行を行う家臣（給人）も領主として位置付け、徳川領国と同じとしている。

両領国の配置は図1<sup>(5)</sup>である。なお、図には徳川領国の規模の参考にするため丹波国亀山（現亀岡）を拠点とした譜代大名の移封状況を線で示している。

このような両領国の考えは、山城国等の所領構成（領地のあり方）の分析<sup>(6)</sup>、上方八カ国（畿内近国）と阿波、因幡、伯耆国を比較した同分析、全国まで広げての同分析、外様大名の分析などを経て至ったものである。詳しくは別稿を参照していただきたいが、これら分析には、鳥取藩で行われていた、大身の給人が行う自分手政治（一章後述）やその他の給人による地方知行制度（同）のあり方を参考としている。この過程で徳川領国については藤野保氏等の先行研究<sup>(8)</sup>を確認し、学んだ。この考えは以前（藤野氏所論は一九六一年）からあったが、ほとんど関心を持たれていない状況である<sup>(9)</sup>。

さて、「公儀触」の「公儀」とは、朝尾直弘氏の見解「武家の支配権力」とし、具体的には「藩を公儀とした場合、それより上級の公儀の意味

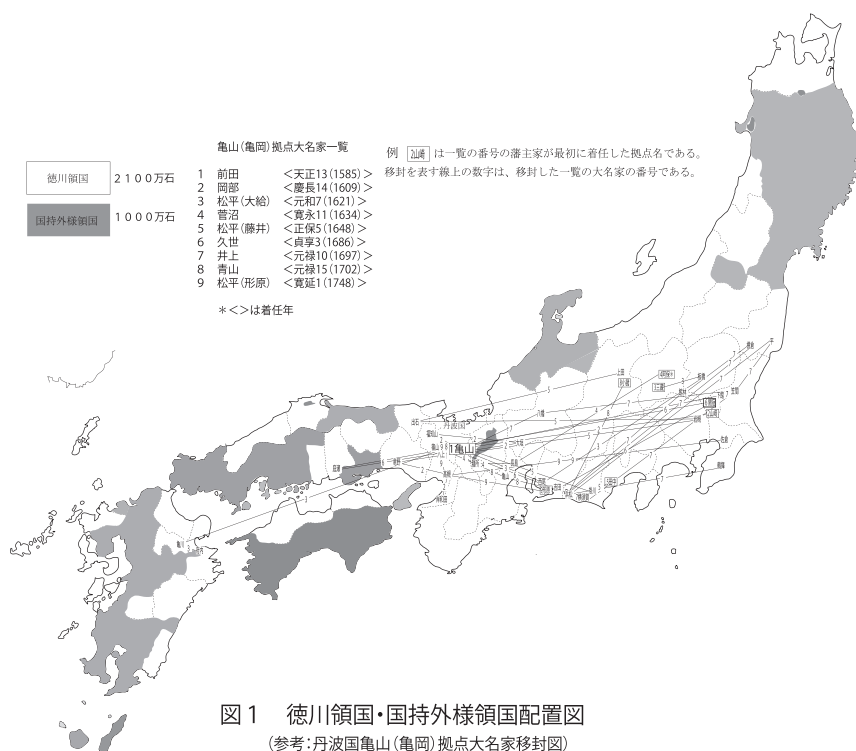


図1 徳川領国・国持外様領国配置図

(参考:丹波国亀山(亀岡)拠点大名家移封図)

で」の「大公儀」とする。<sup>(10)</sup> 但し、以下、単に「公儀」として使用していることもある。同氏の見解は後でも述べる。したがって「公儀触」とは、「触」は藤井譲治氏の見解によって、「大公儀(単に公儀とも)の命令等で町や村をとおして伝えられたもの」とする。具体的にはまた同氏見解によって、「老中がかかわる触」とする。なお、公儀触は史料上では「御公儀御触書」「従公儀御触」等と出てくるもので、特定の役所等への命令である「達」も含まれるものとする。

このような公儀触による構造の分析視角は、幕府から浦々や海辺付きの村々を宛所に伝達された浦触を研究されている水本邦彦氏の「各社会の仕組みやあり方は、統治者の意志伝達方法に色濃く投影される」という見解に基づくものである。「意志」の具現である「触」の伝達方法を分析すれば「社会の仕組みやあり方」(構造)がわかるということである。なお、同氏は、近世社会の構造を従来知られている①「幕藩—領民」関係と、浦触伝達によって解明された②「幕—国民」関係の組み合わせにおいて捉え直すことを要請されている。<sup>(14)</sup>

今回は徳川領国を京都(都市域を表す「洛中洛外町統」<sup>(15)</sup>の地域)、山城・丹波・丹後国(以下「京都・三国」、国持外様領国を鳥取池田家領がほぼ占めている因幡・伯耆国(以下「因・伯」)の地域としている。前者は、全てではないが徳川領国の地域性がある程度代表できると考えての選択である。京都は三都の一つで直轄地の都市、山城・丹波国はその京都を中心とする畿内近国内の国、丹後国はそれに隣接し、少数の藩の領地と直轄地からなる徳川領国の周辺に位置する国、というようにそれぞれが特性を有している。また後者は京都・三国と

近く、公儀触発給地の江戸からの距離的条件がある程度等しくなると考えての選択である。また、鳥取県立博物館には鳥取藩政資料<sup>(16)</sup>及び、村の触留等<sup>(17)</sup>が所蔵されていることも要因である。

なお、参考として徳川領国の地域であるが、江戸も分析対象地域に組み入れている。

具体的な検討方法は次のとおりである。最初に、公儀から出された触は、各階層（公儀、領主（広い意味で）、村町）を経て領民に伝達されることから、まず両領国の所領構成（領主、村）とすでに知られている構造を確認する。次に、『幕末御触書集成』<sup>(18)</sup>に収録されている天保一三年（一八四二）一年分の触を基軸の公儀触として、この触の両領国への伝達のあり方（伝達ルート）をとおしてそれぞれの構造を分析していく。そしてその結果から両領国の比較検討を行い、改めて存在を確認し、関係などの実態を解明したい。同年に限ったのは、両領国の村町へ伝達された触が収録される触留等の伝来状況と多数の公儀触が発給された天保の改革の時期にあたるためである<sup>(19)</sup>。但し、その触留等を鋭意調査したが山城国と丹波国については確認できず、他の分析をもって補足したことを予め断っておきたい。

なお、本稿は、次の事情により以下、「藩」の用語の使用を控えることにする。山口啓二氏によれば「藩」は近世中期頃に一門、譜代大名が私称で使用しはじめ、末期には外様大名までが用いたものである<sup>(20)</sup>。国持外様大名にこの用語を使用すると、以下の検討で混乱が生じる恐れがあるため、控えることにした<sup>(21)</sup>。併せて「將軍」<sup>(22)</sup>、「幕府」も使用を控えている。

## 第一章 京都、山城・丹波・丹後国と因幡・伯耆国の所領構成等

### 一 京都、山城・丹波・丹後国

京都・三国の所領構成は、表1（a、b）である。aは、京都、山城国、丹波国、丹後国別に集約している。京都は「近世領主並びに近世村町別閲覧可能関連文書一覧―京都編―」<sup>(23)</sup>により、三国は明治初年頃の記録「旧高旧領取調帳」<sup>(24)</sup>（用語「藩」が使用されている、以下「旧高」等）によっている。京都は地子免許で、公儀直轄であるため、町数のみ入れている。bによると三国の領主は、山城国が六二と特段に多く、丹波国八一、丹後四と激減していく。太閤検地の村切りで生じた生活共同体の村は単に「村」、そのなかに設定される領主の領地を「行政村」としている。村に複数の行政村が設定された場合、村は相給村、行政村は相給行政村としている。朝廷と寺社関係の領主をまとめて「伝統権門」としている。分散・錯綜の度合いをしめす数値である村相給率%（相給村数／全村数）、行政村相給率%（相給行政村数／全行政村数）を示している。両率が高いほど分散、錯綜の度合いが強いということになる。行政村の配置状況の図は、山城国と丹後国の中間の状況を示す丹波国（図2）を掲載した。分散・錯綜している様子がわかる。このような村町を公儀触は限なく伝達されたのである。

京都・三国の内部構造の基本形は「はじめに」で述べた徳川領国の構造であるが、地域により少し異なっている。奉行は推移しているが、

表1 明治初期等京都・山城・丹波・丹後国所領構成

## a 地域別村・行政村状況

	石高	村			行政村		
		村数*	相給村	村相給率%	行政村数	相給行政村	行政村相給率%
京都（洛中 洛外町統）	—	1920（町）	—	—	—	—	—
山城国	222,252	500	231	46	2,049	1,780	87
丹波国*	329,203	998	96	10	1,124	222	20
丹後国	146,724	409	3	1	412	6	2

## b 国別領主別状況

	領主分類		領主数	行政村合計 石高	行政村数	相給行政村 数	行政村相給 率%
山城国	伝統権門	朝廷関係	327	96,719	1,134	1,024	90
		寺社関係	208	35,467	534	504	94
		計	535	132,186	1,668	1,528	92
	代官		4	11,924	92	68	74
	奉行所等		7	27,514	85	62	73
	国内拠点藩		1	21,795	49	22	45
	国外拠点藩		6	13,089	39	3	8
	旗本		39	14,731	81	63	78
	計		57	89,053	346	218	63
	不明		20	1,013	35	34	99
	合計		612	222,252	2,049	1,780	87
丹波国*	代官		1	9,336	41	19	46
	国内拠点藩		7	229,169	713	53	7
	国外拠点藩		7	28,906	98	31	32
	旗本		46	55,930	229	91	40
	計		61	323,341	1,081	194	18
	伝統権門	朝廷関係	6	5,517	25	11	44
		寺社関係	14	346	18	17	94
		計	20	5,863	43	28	65
	合計		81	329,203	1,124	222	20
丹後国	代官		1	40,112	127	2	2
	国内拠点藩		3	106,612	285	4	1
	合計		4	146,724	412	6	2

\*旧高旧領取調帳等によっているため、明治初期の頃の状況を示しているが、多紀・氷上郡は旧高旧領取調帳に収録されていないため、「丹波国六郡旧地頭御料私領高集帳」（京都府立京都学・歴彩館蔵、館古336片山安右衛門家文書34）によって補足し、あわせて旧高の記載についても一部近世末期の状況に変更している（「触にみる近世『徳川領国』内丹波国の構造」（「京都府立総合資料館紀要」〈三八号、二〇一〇年、246 p〉）。

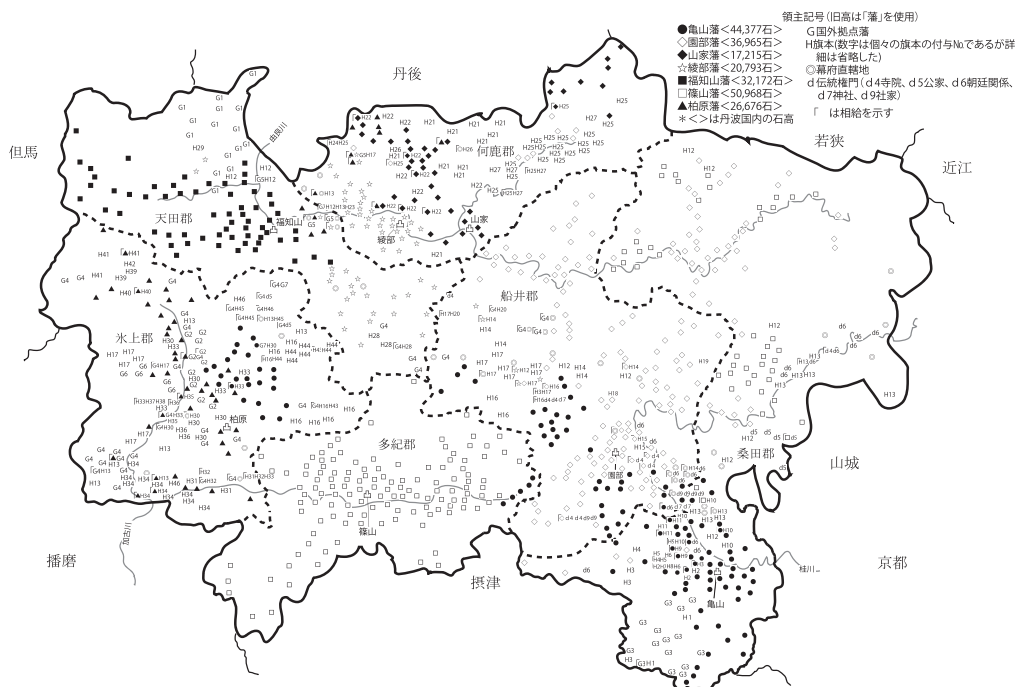


図2 近世末期丹波国領主別行政村配置図—旧高旧領取調帳等より

多紀・氷上郡は旧高旧領取調帳に収録されていないため、「丹波国六郡旧地頭御料私領高集帳」(京都府立京都学・歴史館蔵、寛政336片山安右衛門家文書34)によって補足し、あわせて旧高の記載についても一部近世末期の状況に変更している

近世後期は、京都は広い意味の行政だけの、京都町奉行と町民の「(奉行) ( )」は役人・役所の意) — 領民(町民)、山城国・丹波国は朝廷関係、寺社関係、大名、旗本、直轄地などの領主の上に京都町奉行等の広域行政(「京都町奉行支配国」(後述)があるという「奉行) — 領主」領民、丹後国は、大名、直轄地の領主(代官を含む(後述)と領民の「領主」領民」というものであった。

## 二 因幡・伯耆国

最初に先行研究によって因幡・伯耆国の領主等の推移をみると、

元和三(一六一七)年に池田光政が姫路から鳥取に移り、それまで小大名によって分割統治されていた因幡・伯耆二国が、初めて一人の領主のもとに支配されることになった。その後、寛永九(一六三三)年の「御国替え」による池田光仲の入部以後も、その領域が引き継がれ、廃藩置県まで続いた。

鳥取藩の領域は、ほぼ現在の鳥取県域と同じだが、大山山麓周辺の三〇〇〇石(一八カ村)は大山寺領として独立した領地だった。

ということである。光政、光仲の両池田家をめぐる状況を少し補足する。

両池田家の祖は池田恒利である。恒利の子恒興(信輝)は織田信長、



豊臣秀吉に仕え活躍するが小牧長久手の戦いで徳川軍の攻撃により長男元助とともに討死する。同家を継いだのは恒興の二男輝政であった。後に輝政は仇敵家康の娘を後妻に迎え、関ヶ原の戦いでは家康を支えた。<sup>(7)</sup>輝政はその戦功で播磨国五十二万石の大名となり姫路を拠点とした。その輝政の長男利隆の子が光政であった。後妻との間の初めての子が二男忠継で岡山を拠点とする大名となったが亡くなり弟で三男の忠雄がその跡を継いだ。その子が光仲であったが、跡を継いだ時、三歳であったために光政と光仲が前述の「御国替え」となり、ここから本家「岡山池田家」、分家「鳥取池田家」が始まるのである。<sup>(8)</sup>

ところでこのような経緯のある分家鳥取池田家は「外様国持大名ではあるが、戦国期からの大名ではなく、(中略)藩祖池田光仲は徳川家康の曾孫にあたり、徳川家の家門的な存在であった」と指摘される家である。このことから、徳川領国へ属する家、といわれるかもしれない。しかし、本家は国持外様であることから、国持外様領国に属するとしている。

所領構成の集約は表2(a、b)である。給人も領主として旧高(鳥取藩領分)と寺社領のみを掲載)と地方知行のデータ「弘化二年巳九月 因伯給人所付帳」(後述、以下「所付帳」)をあわせて分析した結果である。<sup>(9)</sup>

同家の地方知行は、明暦二年(一六五六)に給地(行政村)ごとに決められていた年貢率を給地平均の率とする改変が行われ、同時に年貢の未進があったときは、同家より肩代わりされることになり、結果、給人と給地との関係はほとんど断絶された形となったとされるが、給

表2 明治初期因幡・伯耆国所領構成

## a 国別村・行政村状況

	国	石高	村			行政村			備考
			村数	相給村数	村相給率%	行政村総数	相給行政村数	行政村相給率%	
1	因幡	193,342	561	387	69	1,799	1,625	90	**
2	伯耆	245,035	778	419	54	1,444	1,085	75	
	合計	438,377	1,339	806	61	3,243	2,710	84	

## b 領主別状況

	記号	領主	領主数	石高	行政村数	相給行政村数	行政村相給率%	備考
1	◎	池田家直轄	1	228,947	1,310	803	61	**
2	D	寺社	*	4,835	134	112	84	
3	K	給人	578	204,594	1,799	1,795	99	
	合計		579	438,377	3,243	2,710	84	

\* 未同定のため省略。

\*\* 旧高旧領取調と給人所付帳から算出。\*所付帳の給人高が旧高の鳥取藩領分高を超過した場合(7村)、鳥取藩領分(池田家直轄高)は無としている。旧高に、武蔵国秩父郡寺尾村鳥取藩領分 167 石余、とあるが、今後の課題とする。

人と給地とはなんらかの関係（種米の貸与等）が続いていたともされるものである。また、給人の給地・石高が記載される管理台帳ともいべき前述の、弘化二年（一八四五）成立の所付帳<sup>(33)</sup>が作成されており、それは明治四年（一八七一）ころまで修正が続いていた。このことにより同家では同制度が存続していたと本稿では理解している。<sup>(34)</sup>

なお同家の地方知行について少し補足しておきたい。

これまで一般的に地方知行制度については形骸化したとして等閑の傾向があるように思われるが、この制度は国持大名家で実施されていること<sup>(35)</sup>から本稿では無視できない制度と考えている。鳥取池田家の地方知行に関する史料は、管見ではあるが、所付帳のほか少なくとも実態の分析まで至らなかった。しかし『東郷町誌』（現東伯郡湯梨浜町東郷）には、寛政一二年（一八〇〇）に「川上村（伯耆国河村郡、旧高村高は二一〇石余＊本稿注）の給人吉田三右衛門がよそから借銀するについて、川上村の住民四四名がその居宅などを抵当物件に提供している。給人と給所の農民との密接な関係を示すものといえよう。」<sup>(36)</sup>とあり、根拠史料も掲載されている。根拠史料によると、借銀は銀一四貫三〇〇目で、同村住人からは「御地頭様」と認識されていた。そのほか給人と行政村との繋がり<sup>(37)</sup>の例は山中寿夫氏の論考に紹介されている。このようなことから池田家での地方知行が確認できる。

また、地方知行制度は、仙台伊達家等の給人が領主として年貢を直接徴収し続けた同制度<sup>(38)</sup>、改変された池田家等の同制度など多様である。同制度のさらなる分析が望まれる。

表2にもどって給人が関係するデータは所付帳の修正の最終段

階の明治初年ものである。aは因・伯を合した結果で合計石高は四万八千三百七十七石（池田家表高三万三千二百石）となっている。bも同様で、領主は池田家直轄、寺社、給人<sup>(40)</sup>としている。その数は寺社が、同名であるが異なる寺社があつて同定できない数となっているため、五七九としている。給人も領主とした相給率は、村相給率六一%、行政村相給率八四%で三国（山城・丹波・丹後）平均の前者一九%、後者三六%より高率である。

行政村の配置は図3・4（図3の鳥取城付近拡大図）である。池田家直轄地は◎、寺社領はDとしている。給人一人ひとりを記号化できなかったが、給人をKとして、その右に村の給人数（行政村数）を付して示している（例…K8）。相給状態の場合は「―」を最初の記号の前に付している。同家領で実施されていた家老等の大身給人が行政を行う自分手政治の町等（米子等）を●印、鳥取城を凸印で示している。●、凸の近辺にKが多く配されていることなどがわかる。

池田家当主・家中（家臣団）と領地の在（村）町等からなる総体（以下「当主家中在町」）の構造を先行研究と後述の分析結果であるが公儀触の伝達経路を中心みると図5となる。図中の各役所、触伝達関係役人等については次章の検討の中で述べることにしたい。なお、自分手政治（町等）の図における位置付けは、伝達ライン上へのみ位置付けをしている。また池田家当主へのラインは後述の分析では確認できなかったが、重要事項の触についてはこれも後述の先行研究（池内敏氏論考）のように協議しているので、「（…）」としておいた。



(池田家直轄・寺社・給人) 別行政村配置図

(鳥取県立博物館蔵「鳥取藩政資料」) より



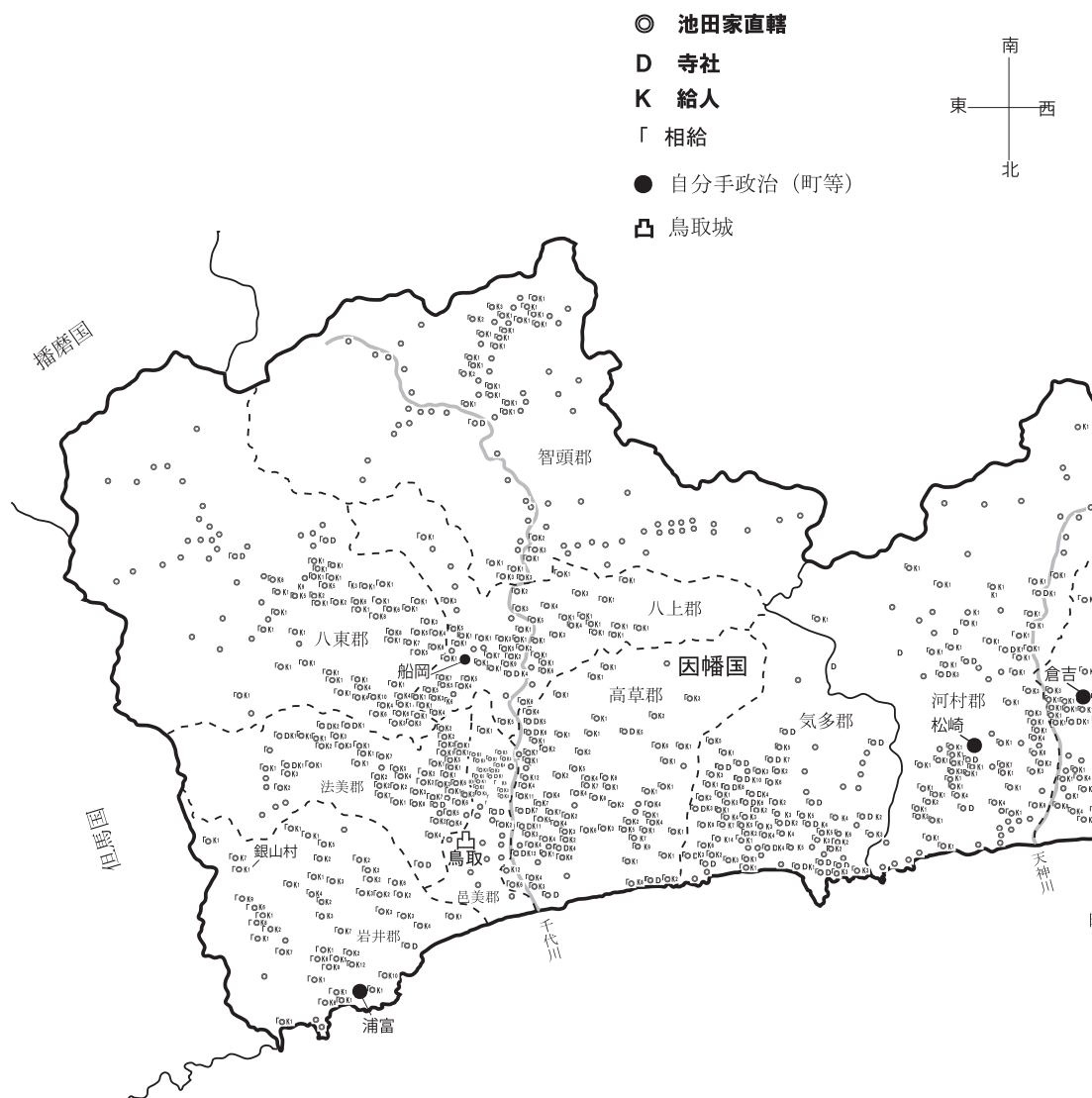


図3 明治初期因播・伯耆国領主  
旧高旧領取調帳と弘化二年給人所付帳



た触の数も「\*ほか：触」として補記している。幕末集成の補足のため江戸城御用部屋での触の作成、老中からの渡方等がわかる「被仰出之留」<sup>(49)</sup>のd欄を設けて、幕末集成との対応結果（○印）を入れている。右側の欄はe江戸、f京都、g丹後国、h i j k l m因・伯の各階層（家中・村）とし、関係地域に伝来した触留等に収録されている公儀触と幕末集成との対応結果（○印）入れている。各欄の触留等は次の二・三・五節、三章で説明する。d～mと基軸との対応触数の集計結果は表3のとおりである。なお、f、h～lには公儀触と判断されるが幕末集成には対応しない触が二二触（同内容の触もある）あった。その触の冒頭文は表4のとおりである。

長くなったが公儀触の伝達状況を確認していききたい。それによって構造（伝達ルート）を見たい。

dには対応していないが、e～m全てに対応している触「通用停止之古金銀早々可引替之事」（以下、幕末集成四一・一三）の伝達状況を順に追い、併せて各

表3 d～m各収録公儀触数

記号	触留等名	対応触数	未対応触数	計
(基軸)	(幕末集成)	453	—	—
d	被仰出之留	5	0	5
e	江戸町触集成	210	—	210
f	京都町触集成	40	3	43
g	郡中代日記	10	0	10
h	公儀御触控	76	6	82
i	江戸家老日記	71	10	81
j	家老日記	10	1	11
k	在方諸事控	7	1	8
l	町奉行御用日記	4	1	5
m	銀山村御用状写	3	0	3

表4 『幕末御触書集成』（天保13年）未対応公儀触一覧

記号	触留名	月	日	触冒頭
1	f	京都町触集成	3	菱垣樽船荷物之義規定有之候処…
2			6	江戸町方江申渡 今度十組諸問屋冥加上金御免相成…
3			11	風之儀、近來絵物彩色等無益二手を込…
4	h	公儀御触控	1 9	一当月東叡山 御霊前 御参詣…
5			1 9	万石以上、并諸番頭、諸役人之諸大夫斗 可被罷出候 …
6			5 4	町中ニ而家屋敷致売買候節、町礼かろく致…
7			5 27	御祝儀事、其外都而万石以上之面々より献上物…
8			7 14	拾万石以上之面々蔵板書物之儀、此度御触出候処…
9	i	江戸家老日記	12 18	一歳暮之為、祝儀、老中堀大和守、若年寄中江被相越候儀…
10			1 23	覚 一來ル廿六日より廿八日迄於上野 文恭院様御一周忌…
11			2 9	当月十八日釈奠被 仰出候ニ付…
12			2 17	来卯年四月日光山 御宮御参詣可被遊旨被…
13			5 5	町中ニ而家屋敷致売買候節町礼輕く致し振廻ニ堅無用…
14			5 26	上野文殊楼御修復ニ付…
15			7 14	拾万石以上之蔵板書物之儀…
16			8 7	当月十一日釈奠被 仰出…
17			11 14	上野文殊楼御修復ニ付同所往來差支候付…
18	j	家老日記	11 23	来卯年四月十三日日光山江 御参詣 御発駕之節…
19			12 21	一歳暮之為祝儀老中堀大和守、若年寄中江被相越候儀…
20			8 8	近年諸色之儀、元方手薄相成り…
21	k	在方諸事控	8 8	近年諸色之儀、元方手薄相成り…
22	l	町奉行御用日記	8 14	近年諸色之儀、元方手薄相成り…

地域・各階層の諸状況もみていきたい。幕末集成四一一三の内容は次のとおりである。

〔12〕七月廿日、〔1〕八月二日

四一一三 天保十三寅年八月六日

〔13〕

水野越前守殿御渡

大目付江

文政度以来金銀吹直被 仰付候処、当時保字金銀、壹分銀、貳朱金等を以、専世上通用ニ被成置候、右ニ付而者、文政度之文字金銀、草字貳分判、貳朱銀、壹朱銀等、此度不残通用

停止被 仰出候間、其旨相心得、凡古金銀、是迄停止之品其所持致し候者ハ、多少共有体之員数銘々より書付、其筋へ可差出候、数度引替之義相触候得共、今以引替残りの高不少候者、畢竟金銀持圀候余力之者共、品位宜と存し候方を宝と致し、隱置候故ニ候哉、人情ニおゐて無謂事ニハ無之候得共、心得違ニ而候、(中略) 此上猶隱置候ハ、取上之上嚴敷各可申付候、此旨能々相心得、違犯致間敷候、

右之趣、諸国御代官所、御預所、諸奉行所、私領ハ国主、領主、地頭より不洩様為触知、停止之金銀所持之有無吟味致し、所持之者ハ為書出、御勘定所江右書付可差出候、引替遣方之儀者、御勘定奉行江可申達候、若持隠し之吟味、不行届等閑之儀も有之におゐてハ、面々可為越度候、右之通、可被相触候、

八月

(注記の史料番号等を省略した部分もある)

文政期鑄造の貨幣と天保期鑄造の貨幣との引替が進まないため発給された触で、老中水野越前守忠邦から大目付(初鹿野信政外二人の内)へ渡されている。日付(幕末集成凡例では出典史料を作成した役所等に当該触が到達した年月日)は八月六日となっている。出典は、柳間席大名家の編纂であることがほぼ疑いないとされる「幕令類編」(内閣文庫本)である。触先が「諸国御代官所、御預所、諸奉行所、私領ハ国主、領主、地頭」とあり、いわゆる全国触(令)である。全国触については後述する。

## 二 江戸(参考)

徳川領国を分析する際には江戸は必須の地域であるが今回は京都三國を対象にしているため参考としている。江戸での町への触の伝達は町奉行から町年寄(三人)、町名主、各町の月行事を通じて行われ、一八世紀ころから重要なもの以外の触は町年寄役所から通達されるようになった。<sup>(50)</sup> なお、町触には老中の命によるもの、または老中に伺いの上で発給する惣触、町奉行が自己の権限で発給する手限町触があった。<sup>(51)</sup>

江戸町触集成(以下、江戸集成)には天保一三年分三九三触が収録されている。基軸としている幕末集成にも収録されている触二一〇

(子番号まで展開)を公儀触としている。本来ならば惣触を対象とするべきであるが、江戸集成一年分の触から厳密に惣触であると確定して抽出することは困難である。そのため幕末集成の二一〇の触が全て惣触であるかどうかの問題も残ることは承知している。<sup>(52)</sup>幕末集成四一・一三の記事は次のとおりであった。

#### e 江戸町触集成<sup>(54)</sup>

(幕末集成四一・一三本文)

右之通御書附出候間、町中不洩様入念可相触候

八月三日

町年寄役所

(江戸集成一三六八五、校注の符号等は省略)

記事から町年寄役所から八月三日に町へ伝達されていることがわかる。「従公儀」の記載はなかったが、要約すると「公儀―(奉行)―町民」(「〇」は中継する役人等の意)の伝達ルートである。

### 三 京都

京都(洛中洛外町統)の町への触の伝達は、はじめは所司代、次いで京都町奉行(所)(寛文八年(一六六八)設立)<sup>(55)</sup>から町との中継事務を担当する二人の町代(洛中)と四人の雑色(洛外町統)を通して行われていた。

京都町触集成(以下、京都集成) 天保一三年分の底本は、下京上艮

組衣棚町(南北)と上京下一条組冷泉町に所在した三井本店に伝来した触留である。収録された同年の触の総数は、触番号によると一七〇触である。この内、公儀触は四三触(内三触は幕末集成未対応)である。幕末集成四一・一三の記事は次のとおりであった。

#### f 京都町触集成<sup>(56)</sup>

(幕末集成四一・一三本文)

右御書付従江戸到来候条、洛中洛外へ不洩様可相触もの也

寅八月

(京都集成通番五九八、注省略)

添書には「従公儀」の類の文言はなかった。公儀触と判断した根拠を確認しておきたい。

添書中の「従江戸」に注目したい。

この「従江戸」触は、幕末集成に対応する公儀触四〇触の内に二二触ある。その中にd被仰出之留に対応している触(別表幕末集成三二八四・四二二三)がある。dに記載されている「右書付渡方」の関係部分は「京都 大坂 駿府 甲府 山田 佐渡 右次飛脚之節遣之」(四二二三分には「右次飛脚之節遣之」部分はない)の「京都」で、この「京都」には、所司代、京都町奉行、伏見奉行、奈良奉行が含まれているようである。<sup>(57)</sup>これにより基本的に御用部屋(老中)から次飛脚によって所司代へ伝達され、そこから京都町奉行所へもたらされ



ると判断した。dに対応していない「従江戸」触についてはこのような確認ができないが、対応している幕末集成収録の触の記事冒頭をみると「水野越前守（老中）殿御渡」等とありほぼ老中から出されていることがわかる。これにより「従江戸」の触は老中からの公儀触とすることになる。

「従江戸」以外の残り一八触には、「右之趣此度於江戸表名主共江申渡有之、（中略）、此旨洛中洛外江」<sup>(58)</sup>のように「於江戸表」（または「江戸表二而」等）が記されている。これは、一度江戸市中に伝達された触が何らかの経過があつて、京都に伝達されたことになる。別表でこれらに対応する幕末集成収録の触の記事を見ると、冒頭が「水野越前守殿御渡 大目付江」（幕末集成四〇二七）のように老中が関係する触が九触ある。そのほかは町奉行所より町へ出されたことがわかるがそれ以上のことは不明である。「於江戸表」が記される触は、まず江戸の町中へ伝達されたあと、またはそれを前提として京都へ伝達されたもので、不明もあるが多くは老中が関係していたと判断して公儀触とした。

以上公儀触であることの確認を行った。京都に伝達された触には、老中からの直接の公儀触と老中も関係するが一端江戸にかかわって到来する公儀触の二種類あったことになる。「従江戸」、「於江戸表」など江戸との密接さがあるがえる。

ところで、京都町奉行所からの触を洛中の町々へ中継した町代の一家古久保家に伝来した「御触頭書」（触書の要約を簡条書きにしたもの）<sup>(61)</sup>によると公儀触は四七触となる。京都集成天保一三年の四三触以外にも四触多く伝達されていたことを確認しておきたい。

京都には、老中直接と老中も関係するが一端は江戸にかかわった公儀触が所司代へもたらされ、京都町奉行所はそれを受けて、町代・雑色が町へ伝達した。伝達ルートは「公儀―（奉行）―町民」であつた。「従公儀」の記載は京都町奉行所からの添書にはなくそれは「従江戸」等であつた。江戸との密接さがあるがえる。

#### 四 山城・丹波国（補足）

山城、丹波の各国に関係する天保一三年の触留等は今回確認できなかった。先にみたf京都集成の記事中の添書にある「洛中洛外へ（江）」の記載や別稿により両国の公儀触伝達の状況を補足しておきたい。

京都集成は洛中洛外町統（一九二〇町）の都市域を触先として編纂されているが、結論を述べると同集成の「洛中洛外へ（江）」の「洛外」は洛中を除く山城国全域を意味していると判断される。このことは、別稿「近世『徳川領国』における山城国の構造」<sup>(63)</sup>から判断していることである。別稿では、享保一六年（一七三一）～文久四年（一八六四）間に山城国内に伝達された約九五〇触を地域に伝来した触留等から確認したが、その内江戸からの触（「従江戸」等の公儀触）は一九五触あり、京都町奉行所（一八二触）、宇治上林代官（六触）、伊勢国津藤堂家（六触）、京都代官（一触）が中継していたと整理した。<sup>(64)</sup>

京都町奉行所経由で村へ伝達された公儀触の添書の触先文言が「洛中洛外」となっている触は三四<sup>(65)</sup>あつた。「山城国」となっているのは二二、同国全域を対象として各郡ごとに村継ぎで触を伝達する「郡切



（限）」による触が二九あった。そのほかは触頭雑色名、京都町奉行名の記載、触の内容などから山城一国を対象とすると判断される触であった。これから江戸からの公儀触は京都（洛中洛外町統）と同じ頃に洛外（山城国）にも伝達されていたと判断される。

なお、山城国の場合、公儀触の伝達ルートは、近世後期には三ルートあった。①方内ルート、②郡切ルート（前述）、③領主ルートである。①は慶長六年（一六〇一）、所司代板倉勝重の命によるもので、京都四条室町の辻を基点に同国を水平垂直に四分割し、所司代、その後は京都町奉行所からの触（公儀触も含む）を、雑色を触頭として各分割地域の村々に伝達するものである。②は京都町奉行支配国の一機能としてのものである。支配国は、藪田貫氏によって明らかにされたもので、はじめは京都町奉行（寛文八年（一六六八）設置）、京都代官が上方八カ国を対象に司法立法を含むひろい意味の広域行政を行う体制であった。<sup>(66)</sup>その後、享保七年（一七二二）に京都町奉行支配（山城・大和・近江・丹波）と大坂町奉行支配（摂河・河内・和泉・播磨）に国分けされて両支配国が成立した。③は、従来の領主から領民へのルートである。①②とも、「公儀——奉行——領民」ルートである。③は、領主である公家、寺社、旗本等は触の伝達を管見では行っていない。<sup>(67)</sup>なお、①③は平行して行われていた。先にみた藤堂家は伊勢国津を拠点とする国持外様大名であるが、山城国にも一四行政村、約七〇〇石の領地があった。<sup>(72)</sup>その行政村に江戸からの公儀触を領主として添書に「従公儀」と記して伝達している。しかしながら、同行政村には①②ルートでも公儀触が伝達されている。<sup>(73)</sup>

以上により山城国は触伝達が基本的には三ルートで行われていたが、「公儀——奉行——領民」のルートが主要となっていた地域といえる。次に山城国と同じ京都町奉行支配国の一つ丹波国について補足したい。拙稿「触にみる近世『徳川領国』内丹波国の構造」<sup>(74)</sup>で、慶長一八年（一六一三）～慶応三年（一八六七）間に丹波国内に伝達された約五二〇触を、地域に伝来した触留等から確認したが、その内江戸からの触（公儀触）は一八四触あり、京都町奉行所（七二触）、京都代官（六触）、船井郡園部小出家（五触）、天田郡福知山朽木家（三触）、桑田郡亀山（現亀岡）松平家（二触）、多紀郡篠山青山家（二触）、旗本谷家代官（一触）、不明（九四触）が中継していた。京都町奉行所が最も多いが中継した触のうち四四触は郡切での伝達であった。なお、郡切での伝達は青山家領では同家の大庄屋の機構を経由することもあり、小出家領内に郡切の触が伝達されてきた場合、一端、同家の役所へ届け、指図を受けてから村へ伝達されることもあった。また京都代官は公儀触を支配を超えて伝達、大名、旗本も数は少ないが添書きに「従公儀」として伝達していた。

「公儀——奉行——（大名支配機構）——領民」、「公儀——領主——領民」の二ルートがあったといえる地域であるが、前者が主要といえる地域である。

山城国は三ルートあったが、京都からのルートが主要であり、丹波国は二ルートあったが大名支配機構が関係する京都からのルートが主要と判断される。大名等の添書には「従公儀」が確認できた。

## 五 丹後国

近世後期の丹後国には三譜代大名領と久美浜代官所領があった。久美浜代官は、熊野郡久美浜村にあった久美浜代官所に詰め、代官所領（公儀直轄領）最大で約六万石の運営を行っていた。代官であるが年貢を徴収し、裁判等を行っていて、領民から「殿様」と呼ばれる存在でもあった。実質的には領主としてよいと考える。その代官（所）と村々を中継する役である郡中代を陣屋元村の庄屋が兼務していた。その日記が郡中代日記（村関係記事も一部含まれる）である。同日記は五月から記録されているため天保一三年の実数は不明であるが、一つ書きで一七七の記事が記されている。その内、公儀触は一〇触であった。幕末集成四一一三の記事は次のとおりであった。

g 郡中代日記<sup>(78)</sup>（九月一八日条）

九月十八日

御廻状之写

（幕末集成四一一三本文）

右之通御書付出候間、得其意御触之趣堅相守文字金銀草字式分判式朱銀毫□銀所持候者、有体之員数一村限り取調□可書出候、此廻状村名下令受印、刻付を以早々順達、留村より可相返者也

寅九月十八日 久美浜御役所

久美浜始り、新谷村留り

未上刻拝見、即刻神谷村江継送り申候、以上

添書に「従公儀」の類の文言はなかった（その他の九触にもないが、「江戸表より被仰出」が一例あり）が、内容によって公儀触と判断した。取調べを命じているなど周知徹底がうかがえる記事である。陣屋元村に約一カ月半を要して伝達されている。

同国の天保一三年の触留等は管見ではこのgしかなかった。しかし、他の時期になるが、宮津本庄家領（丹後領六万石）の与謝郡算所村の庄屋の御用帳<sup>(79)</sup>（嘉永五年三月〜同八年二月）を見ると「従公儀」等の記載、内容により公儀触と判断できる二二触<sup>(80)</sup>が確認できた。何れも郡奉行経由の「公儀―領主―領民」ルートの触である。大部分が全国触であるが、そのなかに老中から（江戸）町奉行に市中への伝達を命じている触が二触があった。「問屋組合再興ニ付素人直売買制禁之事」<sup>(81)</sup>、他の一つは幕末集成に対応していない「火之元取締につき武家屋敷にても入念のこと」<sup>(82)</sup>である。これらは本来江戸にかかわる触で、触先文言には「向々（諸方面）へ」とあるが、本庄家領の村まで伝達されている。江戸との密接さがうかがえるものである。そのほか峰山京極家（一万石）領の町の記録中に注目すべき触があった。

明和三年四月十八日<sup>(マ)</sup>二

町御奉行中より御紙面写シ如左也

宝曆九年卯年絞油草之儀、公儀御触有之、久美浜従御代官所申来、町在へ相触候、右御触書之義又々此度御触有之、江戸表御屋敷へ

御廻状にて左之通之御触書ニ候、尚又町在方へも相触候様ニ被仰出候ニ付、右御廻状之写し一通為持遣候、町中不残様ニ相触可被申候

四月十八日

但し、御触書之趣左ニ書写ス

今度、從 公儀左之通被 仰出候間、御書付之趣可相心得候、以上

戌ノ四月十八日

〔絞油稼禁止并手絞之油大坂え可積登之事（御触書天明集成二九六一）本文〕

（後略）

〔「明和三年御用諸色之控」〈『峯山藩関係史料集成』

京丹後市、二〇一〇年、一二五頁〉

触は、宝暦九年（一七五九）に出された絞油草の触にかかわって明和三年（一七六六）三月に出されたもので、この公儀触を久美浜代官所が中郡峰山京極家領に触れるように同家（町奉行と判断）へいつてきたので町、村に伝達したところ、またまた同家の江戸屋敷へ同じ触が廻状でまわってきたので、峰山の同家の指示で町、村へ触れた、ということである。同じ触が代官所からの指示と本来ルートの領主経由で伝達されている。山城国でみた京都町奉行所、領主の二層構造が丹後国にもあったということを示す例である。公儀触に関係しないが二層構造の例には次のようなこともあった。寛政一〇年（一七九八）、

久美浜代官（野村権九郎）が、蚕糸生産奨励のため蚕飼種の斡旋の触を峰山京極家の町奉行を通じて同家領へ伝達している。

「公儀―領主―領民」とともに、例は少ないが「公儀―（代官所）―（大名支配機構）―領民」（代官所）は領主ではなく役所の意）ルートがあったと判断される。代官所からの添書には「従公儀」等はなく、大名のそれにはあった。

まとめ

触数が特徴的である。江戸二一〇（幕末集成の四五％）、次いで京都四三（同一〇％）、丹後国は一年分ではないが、一〇触（同一％）と減少していく。京都への触は約半分が一端江戸にかかわっての触であった。天保一三年の触留等を確認できなかった山城国は触伝達に三ルートあったが、京都町奉行所よりの伝達が主要であった。同じく丹波国も二ルートあったが、同奉行所よりの伝達が主要となっていた。それには大名の支配機構がかかわっていた。丹後国は久美浜代官所の存在が注目された。また、宮津本庄家領には江戸にかかわる触が伝達されていた。触の内容は多様である。奉行所、代官所等の添書には「従公儀」の文言はなく、大名等のそれにはあった。

触伝達ルートの集約は「公儀―領主―領民」とともに「公儀―（奉行）―領民」、「公儀―（奉行）―（大名支配機構）―領民」（代官所）―（大名支配機構）―領民」ルートである。さらに集約すると「公儀―（奉行）―領民」ルートが主要という特徴があった。

### 第三章 因幡・伯耆国の公儀触伝達にみる構造

#### 一 江戸留守居

鳥取池田家の江戸上屋敷は、江戸城に近い八代洲にあった。そこに国持大名である同家当主（参勤時）、家老、用人、目付、留守居等がいて、公儀、諸大名等との交渉、交際等にあたっていた。その屋敷で、公儀触を書き留めた結果が公儀御触控である。天保一三年分には公儀からの触八二（内六触は幕末集成未対応）が収録される。幕末集成四一一三の記事は次のとおりである。

#### h 公儀御触控<sup>(84)</sup>

一、八月六日到来

水野越前守殿御渡候御書付写壺通相達候間、被得其意、答之儀者岡村丹後守方江可申聞候、以上

八月六日

大目付

松平因幡守殿

留守居

（幕末集成四一二三本文）

前書によると、大目付が、老中水野忠邦から渡された「御書付」の写を松平因幡守（池田家一〇代当主慶行）の家臣である公儀や諸大名家との交渉にあたる留守居<sup>(85)</sup>（御聞役）へ達したことがわかる。八月

六日の授受である。この留守居の日記の八月六日条は「一大御目付中より之御達書到来、別記、但し、金銀引替之御達也」とのみある。「別記」の内容がこの記事と判断している。前書中の「到来」について確認しておきたい。服藤弘司氏によれば、この触が到来する前年天保一二年（一八四二）一〇月頃の池田家は、公儀触に関して、本来が「格通之家」でありながら国持へ「籠り」、「各（格）通渡」（「独渡」）ではなかった、とd被仰出之留の関連記事から指摘されている。「格通之家」とは、同氏によれば「大名格式により、各自に通ずつの触書が下付された大名」家である。<sup>(86)</sup>当主亀丸（慶行）が同年に前当主の死去にともなうて分家から入った養子で、当時九歳と幼少のためとおもわれるが、この時期は格通之家の国持を除く国持大名グループへ含まれていたようである。このグループの国持大名や他大名には同氏によれば、「割渡」によつて伝達がおこなわれていた。「割渡」とは、大名を、いくつかの組（合）に分け、各組合の代表者へ触書写を渡し、各組合内を回覧させる方式、とされる。<sup>(88)</sup>また、これら方式ばかりでなく、触の内容によつては「銘々渡」もあつたとのことである。触書写一通か、回覧の触書写の到来なのか判然としないがこの事情は保留しておきたい。まず留守居宛に老中から大目付を介して公儀触が到来し、記録されていたことを確認しておきたい。

#### 二 江戸家老

池田家の家老の一人は江戸上屋敷に詰めていた。その日記が江戸家

老日記である。天保一三年分には当主池田慶行（当時一〇歳）の元服、公方への初の御目見などの記事が、一つ書きで約一九〇〇あり、その内公儀触は八一（内一〇触は幕末集成未対応）であった。幕末集成四一・一三の記事は次のとおりである。

i 江戸家老日記写<sup>(91)</sup>（八月六日条）

一大御目付中より左之通御達し有之候旨、此間御留守居申達候  
二付、御屋敷中江相触候様ニ与触書三通御目付江相渡之、重  
而御飛脚之節御国江申遣ス筈

（幕末集成四一・一三本文）

記事によると、留守居より、大目付から御達しが届いた旨の報告があり、それを触書にして屋敷中への三通（上屋敷等と判断）を目付へ渡し、さらに国元へ飛脚で送る「筈（予定）」とある。hでみた「到来」についてはここでも判然としないが、同日記七月二七日条には、御用番老中土井大炊頭利位より留守居が呼出されて御達書（幕末集成六〇・三三「異国船無二念打払停止薪水等給与之事」）を受け取ったとの記事があり、直接手渡されることもあったことを確認しておきたい。「触書三通」を渡された目付の日記八月六日条は、「一大御目付中より御達し有之旨御留守居より以手紙申越し例之通及返答、別帳記之」とあるのみである。「返答」の内容、「別帳」の存在も確認できなかった。先の江戸家老の指示と整合しないがその理由は確認できていない。「御

国江申遣ス筈」と付記されるのは一六触あった。国元への公儀触伝達のは是非の判断が家老によって行われていたということであろうか。これについては後でも確認したい。公儀触は留守居が授受し、江戸家老へ報告され、今後の取り扱いが指示されている。

三 家老

池田家の家老（三、四名程度）<sup>(93)</sup>は、鳥取城二の丸の御櫓<sup>(94)</sup>で執務を行い、月番がいた。その日記が家老日記で実際の記録者は御帳奉行であった。<sup>(95)</sup>天保一三年の日記には一つ書きで約二八〇〇の記事があり、内容は多様でその内公儀触は一一（内一触は幕末集成未対応）であった。幕末集成四一・一三の記事は次のとおりであった。

j 家老日記<sup>(96)</sup>（九月一六日条）  
一 従公儀左之趣御触有之、今日御家中江相触、委細御右筆手前  
二 記之。  
（幕末集成四一・一三本文）

公儀触を「御家中」に触れ、委細は「御右筆手前」に記録したことがわかる。「御家中」とは一般的には家臣団を意味するが、他の公儀触（同日記九月二二日条、「旅稼之歌舞伎役者共抱入間敷之事」〈幕末集成四七五五〉）の記事の関係部分は次のとおりである。

一 従公義、左之通被仰出候付、左之通相触之、委細御右筆手前



二記之、歌舞妓役者之儀は御目付江申聞置之。

郡代 寺社奉行 町奉行

米子 倉吉

荒尾内匠介江申遣ス。 小八郎より申遣ス。

松崎

豊前より申遣ス。

八橋

浦留

津田石見江申遣ス。 藤輔より申遣ス。

この記事によれば、目付、郡代、寺社奉行、町奉行、自分手政治の町（米子等）を支配する大身給人とその関係者へ伝達している。ほかにこのように詳しく伝達先がわかる同年の記事も一つあるが、「御家中」もこのような内容であろうか。確認しておきたい。

後述からわかるようにこの「御家中」にはまず郡代、町奉行は含まれているといえる。大身給人については、米子町の場合、荒尾家の家臣（池田家当主からみれば陪臣）が町奉行を勤め触の伝達を行っており、その触を町で書き留めた触留（安政五年（一八五八））元治元年（一八六四）<sup>(99)</sup>も伝来している。そこに記載されている公儀触（文久元年五月一六日条（幕末集成四一九三、同四一九四））と対応する家老日記の記事（五月七日条）をみると、「一従公儀、左之通被仰出候段、今日御家中江相触之、委細御祐筆手前二記之。」とありほぼ同文である。これにより、「御家中」には大身給人も含まれる。目付については自身の天保一三年の日記が伝来している。その九月一六日条を確認すると、「△一、左之御触御家老共御家中江相触候付、御当

地触口之面々江相触、米子、倉吉、智頭、用瀬、若桜江茂宿送りを以申遣ス（後略）」とあり、各地の配下の目付へ伝達していると判断される。これによれば、「御家中」には目付も含まれることになる。これで寺社奉行を除くと詳しく伝達先がわかる先の記事と同じとなるが、使い分けの理由は確認できなかった。

なお、本稿では寺社奉行経由の公儀触については史料の関係で省略している。「御右筆手前」は「家中御触控」<sup>(101)</sup>ではないかと思われたが、関係の記載は確認できなかった。同じく「御用部屋日記」も確認したが同じであった。ところで、公儀触の国元への伝達は江戸からばかりではなかった。数は少ないが、大坂留守居経由のものがあつた。これらは本来大坂の蔵屋敷にかかわるものであつたのが、国元へ伝達されている。

先にfで確認した「筈（予定）」の一六触であるが、この家老日記中の公儀触と対応しているのは二触（幕末集成四一一三、同四七一五）だけであつた。この結果によれば、国元への公儀触の伝達については江戸家老が判断していたのではなく、他の誰かが判断していたという可能性があるが今後の課題としたい。

家老は公儀触を家中へ伝達していることがわかる。

#### 四 在御用場

鳥取城外にある在御用場には、在方の統轄を行っていた郡代（一名）、年貢関係事項の吟味等にあたった在吟味役（二―三名）、郡奉行（四名）



等が詰めていた。<sup>106)</sup> その日記である天保一三年在方諸事控には一つ書きで約二五〇の記事があつたが、記事が記される日は一年の内四〇%しかなかった。その理由は確認できていない(天保一四年分の一つ書きの記事は約三一〇)。<sup>107)</sup> 記事の内容は、御法事、勸化廻村、等々で、その内公儀触は八触(内一触は幕末集成未対応)であつた。幕末集成四一・一三の記事は次のとおりであつた。

#### k 在方諸事控<sup>107)</sup> (九月一六日条)

□度以来金銀吹直し被 □付候、当時保字金銀、壹分銀、式朱金世上通用、尤、文政度之文字金銀、草字式分判、式朱銀、壹朱銀等此度不残通用停止被 □出候旨從<sup>(公儀)</sup> □御触有之、委敷者御触控ニ記有之事

記事は簡単で、在方への伝達についての記載はないが、同日記二月七日条の公儀触「於在々芝居等嚴重制禁之事」(幕末集成四七四四、天保一二年の触のため別表にはない)の例をみると、「右御触左之通別紙添御郡々江申遣し候事」とある。「別紙」を添えて、郡ごとに伝達している。「別紙」とは同記事に続けてある触本文と添書のことである。添書には「耕作専一二心懸候様従公義も被 仰出候程之儀」との文言が入り公儀の威光をもって領民へ耕作に専念するよう申し渡している。このような例は、池田家の在方への触(風儀(二月二三日条)<sup>108)</sup>などにおいてもみられた。「御触控」に該当する史料は確認できなかった。同種の「在方御條目控(明和七年、明治四年)」<sup>109)</sup>が伝来している

ので確認したが記載はなかった。

在御用場から各郡へ伝達していることがわかる。

#### 五 町奉行

鳥取城下の鳥取町の町政は、町奉行(二名)が下僚と町役人を指揮して、行っていた。<sup>110)</sup> 奉行は通常は自宅で勤務し、町役人は、本町一丁目にあつた町御用場(町会所)に詰めていた。<sup>111)</sup> 町奉行の日記が町奉行御用日記である。実際の記録者は下僚で、将来の参考利用を視野にいて作成されたものである。<sup>112)</sup> 天保一三年分には一つ書きで約一〇〇〇の記事があり、記事の内容は他国からの商人の止宿届、盗難、池田家関係の法事、等々様々であつた。その内公儀触は五触(内一触は幕末集成未対応)であつた。幕末集成四一・一三の記事は次のとおりであつた。

##### 1 町奉行御用日記<sup>113)</sup> (九月一七日条)

一 左之通御触来り候二付、致点合差返入、并触口之者共江も夫々触出ス

(幕末集成四二・一三本文)

猶以触口有之面々者左之趣触口之者共江茂可被申渡候、以上

従

公義別紙之通被 仰出候間被得其意末々迄可被申付候、以上

荒尾伊勢

乾 八次郎

九月十六日

鶴殿藤輔

和田豊前

荒尾小八郎

諸御役人宛

記事によれば触が来たので合点して（家老の元へ）返し、「触口」の者共へも伝達している。家老連名の添書が添付されている。この「触口」に關係して、他の触の記事を見ると、同日記二月七日条では「左之御触（前述の幕末集成四七四）被 仰出候ニ付、取帰り、例之通役人直触江壹通、町中江相触候様町代江壹通触出ス、尤、例之通御家老中連名ニメ差出ス」とあり、「役人直触」の「役人」が判然としな  
 いが、町奉行關係の役人と町中への触れ役である町役人の町代と判断される。鳥取城下の「町役人」は『鳥取藩史』<sup>(114)</sup>によれば町年寄、町代、町庄屋、大目代、町御用場銀根取等で、その内の「町代」とは、町人で名望あるものが選ばれ、定員は二人、町政の諸触出し、町方家屋敷売買の見届、宗門改、諸運上と町役銀賦課の徴収などを行った役人のことである。なお、町代の日記は確認できなかった。

記事より公儀触の町への伝達が指示されていることがわかる。

## 六 銀山村

本来ならば在御用場以下の行政機構に沿って村までの伝達をみるべきであるができなかった。先行研究から機構を確認しておきたい。機構は「藩―郡―構―（組合）―村」<sup>(115)</sup>である（図5）。「藩」の役所は先にみた在御用場である。郡行政の実務担当は郡奉行で、二、三郡に一名配置されていた。大庄屋の直接的な支配単位とされる構には大庄屋、宗旨庄屋<sup>(116)</sup>が置かれた。構の下に組が設定され有力者が組頭（組頭庄屋）として置かれたが、天保期頃ははっきりとしたことはわからないようである。村には庄屋、株庄屋<sup>(118)</sup>等が置かれていた。

銀山村（因幡国岩井郡、図4参照、現岩美町字銀山）は、旧高によると石高八一石余で、所付張によると給人山崎工允の行政村（給知高四四石余）があった村である。同村に伝達された触は庄屋等を勤めた山口家の当主によって書き留められていた。それが銀山村御用状写である。御用状写の原題は「書状入念之分ハ書写シ置覚帳」であるが、整理で付与された文書封筒記載の書名の「御用状写」を採用している。この御用状写の類は、他の年であるが、同家文書内にある庄屋交替時の文書引継目録には記されないもので、庄屋を勤めた山口家当主が独自に、原題にある「書状入念之分」（重要）という基準にもとづき触を写し留めたものと判断される（取捨選択の可能性がある）。天保一一年十二月二〇日から同一五年四月晦日までの五二の触（公儀触、池田家中からの触等）の記事がある。そのうち天保一三年分の公儀触は三触である。幕末集成四一一三の記事は次のとおりであった。

m 銀山村御用状写<sup>(120)</sup>（一一月七日条）

寅十一月七日ニ参り候

(幕末集成四一一〇②)「似せ金銀錢拵候者并売捌候者取締之事(天保一三年六月二十九日)」<sup>(121)</sup>「本文」

(同四七五五)「旅稼之歌舞伎役者共抱入間敷之事(同年七月八日)」

同)

(同四一一三)「通用停止之古金銀早々可引替之事(同年八月六日)」

同)

一筆申入候、然者

従

公義別紙三通之通被仰出候間、被得其意村々末々迄可被申渡候、右為可申入、如此候、恐々謹言

九月廿三日

石原節之丞

天野利藤太

八石幸左衛門殿

宮本十左衛門殿

右之通被 仰出候間、左様相心得村々末々迄可被申渡候、恐々

謹言

十月朔日

宮本十左衛門

八石幸左衛門

右村々 太(大) 田より奥鳥越迄

庄屋中

記事には、公儀触三触の本文、郡奉行石原と在御吟味役天野から<sup>(122)</sup>

大庄屋八石・宮本宛の添状、大庄屋から太(大) 田より奥鳥越迄の<sup>(124)</sup>各村庄屋宛の添状が記されている。先のk在方諸事控記事中の「御郡々江申遣し候事」のように郡奉行、在吟味役が大庄屋へ指示して、大庄屋が村の庄屋へ伝達したことがわかる。江戸から約三ヶ月を要して銀山村迄伝達されている(幕末集成四一一〇②は四ヶ月である)。

なおこの時の大庄屋の文書は伝来していないので、大庄屋段階での触の中継の様子はわからない。<sup>(125)</sup>

## まとめ

以上、幕末集成四一一三を中心に他の状況の補足を行いながら、追ってみてきた。江戸の留守居が受け取った八月六日から十一月七日まで三ヶ月を要して、各階層の役所(人)を経由して村に伝達されている。各記録には「従公儀」の記載があった。<sup>(127)</sup>「公儀」(家中)「領民」ルートである。しかし、一般の給人による伝達は確認できなかったが、jで見たように自分手政治の町へ大身給人も公儀触の伝達を行っていた。これは「公儀」(家中)「大身給人」(領主)「領民」(自分手政治町民)ルートである。触先がはっきりと分かれている二ルートあったといえる。

最後の銀山村に伝達されたのは取捨選択の可能性がある三触であった。①「似せ金銀錢拵候者并売捌候者取締之事」、②「通用停止之古金銀早々可引替之事」、③「旅稼之歌舞伎役者共抱入間敷之事」である。①②は貨幣関係、③はどちらかというと風紀、奢侈関係である。財

政立て直しのための政策、天保の改革の奢侈取締りの一環で、どれも内容、触先からみて全国触であるが、幕末集成天保一三年分四五三触の1%未満を占めるのみであった。

なお、銀山村で確認された公儀触は取捨選択の可能性があることは指摘しておいたが、取捨選択前の触を確認するには、k在方諸事控、1町奉行御用日記で在町に伝達された触を確認しておく必要がある。その結果は未対応の触と在方へ伝達しない旨の記載がある触、<sup>(128)</sup>銀山村に伝達された三触を除くと、①「姫君様誕生之处表向御弘不被仰出等之事」(幕末集成〇六七四)、②「古金銀等引替残早々可引替之事」(同四一一六)、③「新暦頒行之事」(同四七一五)の三触である。①③に触先を具体的に示す文言はない。②は触先から全国触である。

また、m銀山村御用状写の天保二二年の公儀触は、①「姫君様呼称之事」(幕末集成六七〇) ②「古金銀引替残早々可引替之事」(同四一〇一) ③「大御所様薨御之事」(同一〇〇六) ④「諸国酒造之儀已年以前之三分二造之事」(同四三八五) ⑤「町人男女御法度之衣類着用致問敷之事」(同四〇三六) ⑥「於在々芝居等嚴重制禁之事」(同四七四四)であった。①③を除き全国触である。

その他に、m以外に若干確認できた村関係の触留等があったが、そこに記載されている天保一一年から文久二年の間(天保一二、一三年は除く)の公儀触は、二〇触<sup>(129)</sup>であった。内容は、幕末集成の部立別にみると、①禁裏御吉凶等之事(鳴物停止一触)、②上洛并上使之部(上洛御簾館一触)、③儉約之部(町在家作・金銀具類武器等三触)、④金銀銅銭并出銅古地銅等之部(古文字金引替等八触)、⑤風俗之部(百

姓町人異形衣服冠物制禁一触)、⑥曆書其外書籍并板行等之部(蘭書長崎奉行取締一触)、⑦御尋者并召捕方之部(人相書一触)、⑧唐其外異国通商之部(唐物拔荷取締等二触)、⑨海防之部(異国船渡来防禦一触)、⑩異国人応接之部(外国人書状屈方心得一触)である。全国触が一五触で、具体的な触先がなかったのは①、②、④(内三触)<sup>(130)</sup>であった。但し①②を除いて同類の触が全国触となっていることからこれも全国触の可能性はある。全国触は「おわりに」で検討したい。

ここまで触の伝達を中心に追ってきたため、伝達背景の池田家当主・家中の公儀触に対する論理等にまで踏み込めていない。先行研究から補足しておきたい。池内敏氏は、年代は上るが、池田家初代光仲・二代綱清のころの外様大名が江戸に滞在する意味、それに関連して大名が何をしていったのかを問われた。<sup>(131)</sup>その問いの一つである「幕府との折衝」で、「御用人日記」寛文一一年(一六七二)十一月朔日条の酒造制限令をめぐる折衝を紹介されている。内容は省略するが結果、同令の趣旨を変更するものでなければ、同令の池田家側の解釈が容認されたとのことである。公儀触をただそのまま領内に伝達するのではなく時には同家なりの解釈を行い、伝達していたのである。また、本稿でいう国持外様領国の地域である肥後国熊本細川家領を「領国地域社会」として分析されている稲葉継陽氏は、同社会では「幕令の施行についても領国の事情を勘案して実質不施行の選択をも含めた裁量権が行使された」<sup>(132)</sup>と池田家同様の指摘されている。なお、このような国持大名のあり方は笠谷和比古氏が総括的に指摘されている。<sup>(133)</sup>国持は自立的であったと判断される。

## おわりに―公儀触伝達にみる両領国の構造比較

両領国（京都・三国、因・伯）の公儀触の伝達状況を分析した。分析で得た各「まとめ」から、また関係する論考を学んで両領国の構造を比較検討して、結論へ至りたい。

## 公儀触伝達ルートの集約

公儀触の伝達ルートは、京都・三国は、A「公儀―領主―領民」ルートとともに「公儀―（奉行）―領民」、「公儀―（奉行）―（大名支配機構）―領民」、「公儀―（代官所）―（大名支配機構）―領民」があった。後者を集約するとB「公儀―（奉行）―領民」ルートとなり、Bが主要である。因・伯は、C「公儀―（家中）―領民」ルート、D「公儀―（家中）―大身給人（領主）―領民（自分手政治町民）」ルートがあり、Cが主要である。これらから京都・三国A、B、因・伯C、Dと集約できるがこのことからなが導き出されるであろうか。次に公儀触の発給主体の「公儀」等を再考して、検討を続けたい。

## 朝尾直弘氏の「公儀」の見解と両領国

先に「公儀」は、朝尾直弘氏の見解「武家の支配権力」とし、具体的には「藩を公儀とした場合、それより上級の公儀の意味で」の「大公儀」としたが、同氏は、また別稿で「公儀」は、武家領主の共同利害を保証する機構であるが、それを担うのがその武家領主の「第一人者の『家』の体制」であったと述べられている。さらに近世の国持大名の家中の構造は家門・譜代と外様とからなっていたが、「徳川將軍

家Ⅱ『大公儀』」だけが全国の領主（大名）を「徳川家中」に編成することなく、それとは異なった原理（幕府権力）によって「公儀」（Ⅱ『大公儀』）の権力機構を編成しなければならなかったことを述べられている。<sup>(134)</sup>この同氏の見解は、これまで所領構成の検討からのアプローチが主だった本稿でいう両領国による体制の原理といえるものである。

同氏の見解を両領国にそくして再度読むと、国持大名の家中（家門・譜代と外様）の外様ように、国持大名は、「徳川家中」の外様として編成されなかったと理解できる。しかし大公儀によってどのように編成されたかははっきりと読めない。推測であるが、それは、今野真氏が紹介された仙台伊達家当主吉村の同家と公儀の関係についての見解「国持大名ハ、（中略）全ク御譜代衆之様ニハ無之、御下臣とも客人ともつかぬ様成御あひしらぬ」という編成ではなからうか。なお、この見解は伊達の宗家と一門との関係の説明に用いられたものである。朝尾氏の国持大名家中（家臣）の家門と整合しないようであるが、本稿の徳川領国に対する国持外様領国のあり方もこの（御下臣とも客人ともつかぬ）ように考えている。同氏の「徳川家中」は徳川領国（家門・譜代・旗本・小中外様等）<sup>(135)</sup>で、国持外様領国を編成しうる権力は徳川の「『家』の体制」が担う「大公儀」であったと理解できる。

この見解を進めると国持級大名の公儀の上位には、大公儀とそれを担う徳川の「『家』の体制」、これを「徳川公儀」とすると、両公儀が重なって同居することになる。それは判別しがたいものであったと考えられる。



## 「全国触」及び「その他触」と両領国の公儀触伝達ルート

ここで、二、三章で見てきた公儀触について、触先からすでに指摘してきた「全国触」(確定は困難であるが基本的に触先文言が御料・私領等となっているものなど)とそれ以外の「その他触」とに分類すると、両領国とも全国触としての風紀、貨幣などの触は在町まで伝達される。その他触は江戸(特に多い)、京都・三国(丹後国はg郡中代日記に確実なその他触は確認できないが本庄家領に伝達された江戸にかかわるその他触があった)に伝達されている。

なお、三章の「まとめ」で確認したように因・伯の村には天保二一年の大御所(家斉)薨御の鳴物停止触、同一三年の姫君の誕生の触などの伝達があった。これらには具体的な触先はないが、前者は鳴物停止触の研究で全国触(令)<sup>(139)</sup>とされ、鳴物停止の対象者は「將軍・大御所・(中略)將軍家の人間・御三家・老中・天皇(上皇)」<sup>(140)</sup>であることが明らかにされている。後者についての研究は確認できていないが、「將軍家の人間」に関するもので鳴物停止触と同質のものと考えれば全国触とできる。なお触先が示されずに村町まで伝達される理由については今後の課題としたい。

公儀触天保一三年の一年分とその他若干の公儀触だけによる判断となるが、京都三国にはA、Bルートどちらも全国触とその他触、因・伯C、Dルートは全国触のみでその他触は伝達されていない、といえる。

## 大公儀、徳川公儀の発給触と両領国

大公儀が発給する触はどのようなものであろうか。触先からすれば

まず一部の地域ではなく、全国に伝達される全国触であることは了解できる。内容からすれば全国一律に適用されるものと考えられる。しかし特定は難しいが、まずは全国触は大公儀発給の触としてよいと考える。

では徳川領国ばかりに伝達されたその他触の発給主体はなにかが問題となる。当然、大公儀が地域を限定して発給したということはありえるが、朝尾氏の「公儀」見解を進めてみた、徳川公儀と大公儀が重なって同居するというあり方によれば、徳川公儀からの発給と理解したほうがよいのではと考える。<sup>(141)</sup>よって両領国に伝達される全国触は大公儀、徳川領国内のみに伝達されるその他触は徳川公儀からの触と考えたい。

## 徳川、池田公儀とAルート⇔Dルート、Bルート⇔Cルート

京都・三国A「公儀―領主―領民」ルートと因・伯D「公儀―(家中)―大身給人(領主)―領民(自分手政治町民)」ルートの共通項は「領主」である。これまでの検討によりAの「公儀」は大公儀と徳川公儀(「家」の体制)が重なって同居したもの、Dの「公儀」は、このルートが全国触ばかりなので大公儀、同じく「(家中)」は大名池田家がある公儀(「家」の体制)すなわち「池田公儀」といえる。A、Dの基本型は、「大公儀―(徳川、池田の国持級家)公儀―領主―領民」とすることができ、Aルート⇔Dルートといえる。

京都・三国B「公儀―(奉行)―領民」ルートの「(奉行)」は京都町奉行(所)などであり、徳川の「家」の体制といえる。因・伯C「公儀―(家中)―領民」ルートの「(家中)」は先にみたように池田の「家」



の体制」である。B、C共通項は「『家』の体制」の公儀である。Bルート中の「公儀」は、Aルート中のそれと同じである。したがってB、Cの基本型は、「大公儀―（徳川、池田の国持級家）公儀―領民」とすることができ、Bルート＝Cルートといえる。

元々領主ルートのA、DがあるのにB、Cが発生するとはどういう訳であろうか。Bは徳川領国の重要地域への周知徹底のためにAを補完するルートと考えられる。<sup>143</sup> Cは、本来は大身給人以外的一般給人も領主として触の伝達を行っていた領主ルートの原Dの内、一般給人の触伝達が、地方知行制度に関する山中氏の見解の近世的改編により池田家直轄地で行われていた「（家中）からの触伝達」へ移行して成立したものといえる。そして自分手政治の大身給人だけが触伝達を行う方がDとして残されたといえる。このことは先の水本氏所論の領主権限（行政）が奉行へ分離する状況と同じと考える。<sup>146</sup>

なお、Aでは、公家等は触伝達を行っていない、Bは、丹後国の場合峰山京極家領以外の大名領については確認できていない、CとDの対象地域は重ならず分かれている、これらのことは確認しておきたい。結論―両領国は同質構造で存在、徳川領国は大公儀を担い、池田家領国は自立的

したがって京都・三国（徳川領国）と因・伯（国持外様領国）は、基本型が同質の公儀触伝達ルートを有していることから、同質の構造で、それぞれが別個に存在しているが、徳川領国が大公儀を担い、池田家領国はそれに編成されながら自立的に存在しているといえる。<sup>147</sup> これらの構造を図にしてみると図6となる。

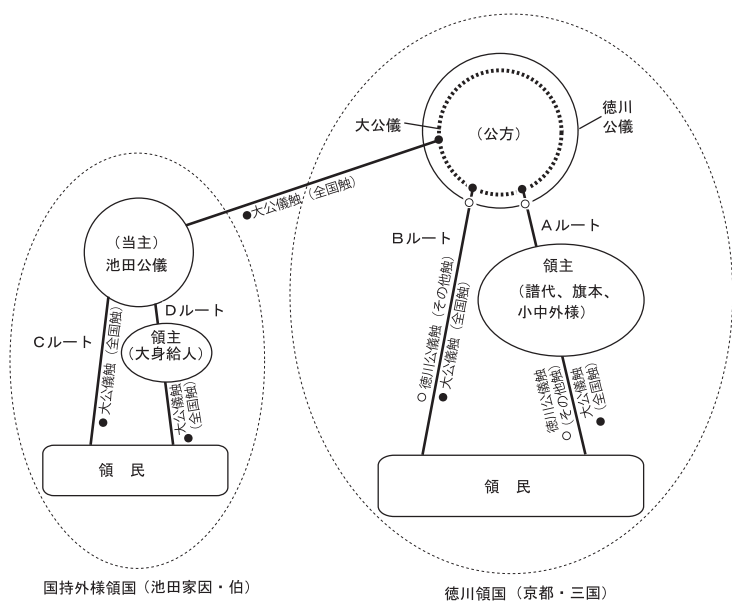


図6 公儀触伝達ルートにみる両領国（京都・三国、因・伯）構造

以上、結論にいたり、新たな実態を明らかにできたと考えるが、課題が多い。まずは、①全国、全期の公儀触伝達による両領国の構造の解明、②近世的な地方知行制の検討、③両領国の生成と終焉、である。①は、行政村配置図を全国にわたっての作成、触留等の収集、「公儀」のさらなる検討、②は、給人の関係資料等の博搜、地方知行を組み込んだ構造の研究を行いたい。③は、まずは先学に学びたい。<sup>150</sup>

追記 本稿を草するにあたって図書館、博物館、アーカイブズの方々に、特に鳥取県立博物館の大嶋陽一氏、来見田博基氏には閲覧・撮影・レファレンス等大変お世話になった。また、報告を聞いて頂き、御意見、御教示をいただいた水本邦彦先生はじめ、ふとで会の会員諸氏、本誌への投稿を奨めていただいた東昇氏など多くの方々にもお世話になった。今回も神谷神社宮司佐治宣幸氏には資料の利用の御承諾をいただいた。皆様に深く御礼を申し上げておきたい。

摺筆するにあたって、水本先生の「歴史研究は『鳥の目』、『虫の目』<sup>15)</sup>」ということばを思い出したが、本稿は上空からの山（公儀・領主・給人・村等）川（触伝達ルート）、領国境の素描に終わった、という感否めない。最後に御批判、御教示等をお願いしておきたい。

# 【注】

- (1) 本稿の幕藩体制の理解は尾藤正英氏の見解（「幕藩体制」国史大辞典）によっている。
- (2) 「第九章 畿内・近国社会と近世的国制」（『近世の郷村自治と行政』東京大学出版会、一九九三年）。
- (3) 笠谷和比古『「国持大名」論考』（井上満郎ほか編『古代・中世の政治と文化』（思文閣出版、一九九四年）。同「幕藩体制下につ

於ける大名領有権の不可侵性について」（『日本史研究』一八七号、一九七八年）。

- (4) ①金沢前田家、②鹿児島島津家、③仙台伊達家、④熊本細川家、⑤福岡黒田家、⑥広島浅野家、⑦山口（慶応四年）毛利家、⑧佐賀鍋島家、⑨鳥取池田家、⑩岡山池田家、⑪徳島蜂須賀家、⑫久留米有馬家、⑬秋田佐竹家、⑭高知山内家、⑮米沢上杉家、⑯盛岡南部家、⑰宇和島伊達家、⑱二本松丹羽家、⑲柳川立花家。
- (5) 近江国の仙台伊達家領（九五〇〇石）、金沢前田家領（二四〇〇石）、山城国の熊本細川家の家老松井家領（三二〇石）、その他国持外様家の公儀御料の預地などは図示できなかった。
- (6) 京都府立総合資料館で、近世の領主と村町ごとに閲覧ができる府域の文書の所在情報を集約する際に行った分析である。「近世領主並びに近世村町別閲覧可能関連文書一覧（丹波、丹後、山城、京都）」（「京都府立総合資料館紀要」二七～三一、一九九九～二〇〇三年）参照。
- (7) 山田洋一「近世『領国』『非領国』社会比較史論―京都府域関係古文書のアレンジメントの前提として―」（「京都府立総合資料館紀要」三二、二〇〇四年）、同「近世『徳川領国』の所領構成における上方八ヶ国の特質について―同（二）―」同三三、二〇〇五年）、同「近世『徳川領国』の所領構成と譜代並外様・国持―同（三）―」（同三四、二〇〇六年）。
- (8) 藤野保「（2）徳川幕藩領国体制の形成」（『幕藩体制史の研究』吉川弘文館、一九六一年）、矢守一彦「幕藩社会の空間秩序につ

いて」(『幕藩社会の地域構造』大明堂、一九七〇年)、今野真「『土芥寇讎記』と大名論」(J・F・モリスほか編『近世社会と知行制』思文閣出版、一九九九年)、針谷武志「領知経営と幕府」(『徳川幕府事典』東京堂出版、二〇〇三年)等。

- (9) 拙稿にふれられたのは、坂本敬司「県外研究者による鳥取藩研究の紹介」(『鳥取地域史通信』二〇〇四年八月一日、一頁)、佐竹輝昭「近世初期における譜代成りの構造―常陸転封後における北羽領主の検討を通して―」(『日本歴史』七二六、二〇〇八年、付記)、高野信治『大名の相貌』(清文堂出版、二〇一四年、六六頁)、羽山久男『知行絵図と村落空間―徳島・佐賀・萩・尾張藩と河内国古市郡の比較研究―』(古今書院、二〇一五年、二二五頁(注1))であった。

- (10) 「『公儀』と幕藩領主制」(『朝尾直弘著作集 三卷』(岩波書店、二〇〇四年、三三三頁) \* 初出「『公儀』と幕藩領主制」(『講座日本歴史五』東京大学出版会、一九八五年)。

- (11) 「幕府や藩の命令や禁止事項」、「町や村をとおして伝えられたもの」(藤井譲治『江戸時代のお触れ』(山川出版社、二〇一三年、二頁)。

- (12) 「被仰出之留」(元禄一〇(一六九七)～一五年、後述)に基づく見解「原則として將軍綱吉の意向を受け、御用部屋で作成」、同「すべてが綱吉の意向を直接反映したものばかりでもなく、老中・若年寄の裁量で作成されたものも多い」(『江戸時代のお触れ』四一頁)による。

- (13) 水本邦彦「『触書』伝達と近世社会」(松原弘宣・水本邦彦編『日本史における情報伝達』(創風社出版、二〇一二年、一五〇頁)。

- (14) 前同一八六頁。浦触については次回検討することにした。

- (15) 近世京都の都市域を示す語。朝尾直弘「洛中洛外町続」の成立―京都町触の前提としての―(『京都町触研究会編『京都町触の研究』(岩波書店、一九九六年)。

- (16) 鳥取県立博物館所蔵。同館編『鳥取藩政資料目録』(同館、一九九七年)が刊行されている。来見田博基「序章 鳥取藩政資料とその研究」(鳥取藩政資料研究会編『鳥取藩研究の最前線』(鳥取県立博物館、二〇一七年)、『鳥取藩政資料』の文書管理と伝来過程について」(『同館研究報告』五五、二〇一八年)参照。今回は同資料中の各種日記を使用するが、東昇氏によれば、このような公的日記についての総合的な研究は膨大なため進んでいないようである。なお、国文学研究資料館編『幕藩政アーカイブズの総合的研究』(思文閣出版、二〇一五年)所収の東昇「対馬藩における文化九年『毎日記』の引用・書き分けと職務」、中野達哉「弘前藩江戸藩邸における日記方の設置と藩庁日記の管理」等が参考になる。在方の庄屋日記等の総合的研究の現状については、東昇「近世日記の総合研究」(『近世の村と地域情報』(吉川弘文館、二〇一六年、二五三頁) \* 本書は肥後国天草郡高浜村の庄屋上田家文書を中心に、文書を群として把握し、特に日記の分析をとおして地域情報の蓄積と村の行政・運営への活用を検討されている)など参照。

- (17) 「名主、庄屋が、町奉行、郡奉行、代官から伝達された御触れ（法令）を帳簿に書きとめ、以後の執務の参考に供したものの」（『御触留』日本国語大辞典）。御触書留・御触書留帳、御用留、御用状留等と呼ばれている。また庄屋の日記にも収録されている場合がある。
- (18) 石井良助・服藤弘司編『幕末御触書集成 全六巻・別巻』（岩波書店、一九九二～一九九七年）。
- (19) 坂本忠久「都市の『触』より見た天保改革の特質」（『歴史学研究』六七〇、一九九五年）等参照。
- (20) 「第四章 藩体制の成立」（『山口啓二著作集 第二巻 幕藩制社会の成立』校倉書房、二〇〇八年、一五八頁 \* 初出『岩波講座日本歴史一〇 近世二』（岩波書店、一九六三年）。
- (21) 三宅正浩氏は、阿波蜂須賀家を対象とした『近世大名家の政治秩序』（校倉書房、二〇一四年）の「序」で従来の「藩」用語について、「主従的な結合に基づく武家集団としての側面を重視する場合には『大名家』『蜂須賀家』という用語」、「『御家』の構成員である『大名』とその家臣団（家中）を中心として、領国を統治する政治組織である藩政機構が整備されていく。こうした機構としての側面を重視する場合には『藩』『徳島藩』という用語で表現する」とされている。
- (22) 「江戸幕府ではもっぱら將軍を公方といい、幕府を公儀（こうぎ）と称した。」（『公方』『百瀬今朝雄』日本大百科全書。藤井讓治「近世『公方』論」（朝尾直弘教授退官記念会編『日本国家の史的特質 近世・近代』（思文閣出版、一九九五年）。
- (23) 「近世領主並びに近世村町別閲覧可能関連文書一覧―京都編―」（京都府立総合資料館紀要）（三一、二〇〇三年）。
- (24) 近藤出版社本（一九六九～一九七九年）と国立歴史民俗博物館のデータベース。その他地名事典等で補足。
- (25) 上方八ヶ国における領主の上部の奉行は、元和元年（一六一五）代官（郡代、国奉行）、元和五年八人衆（岡永井〈直清・尚政〉・所司代・大坂城代・大坂町奉行・堺奉行・五畿内奉行（郡代）・寛文四、五年（一六六四～五）後京都代官・京都町奉行、享保七年（一七二二）京都町奉行「支配国」、大坂町奉行「支配国」となる。山田洋一「近世「領国」「非領国」社会比較史論」、同「近世『徳川領国』の所領構成における上方八ヶ国の特質について」参照。
- (26) 鳥取県立博物館編『特別展 鳥取藩32万石』（鳥取県立博物館資料刊行会、二〇〇四年、二四頁）。
- (27) 伊藤康晴「論考 池田氏一門衆の礎・池田輝政」（『鳥取入府400年 池田光政展―殿、国替えにござります―』（池田光政展）実行委員会、二〇一七年、七三頁）等参照。
- (28) 「『鳥取池田家の前史』（『特別展 鳥取藩32万石』）。「御国替え」に対する大公儀の従来の対応について見直しが求められる史料「柴田寛右衛門披露状（寛永九年（一六三二）、高知県立高知城歴史博物館蔵）」が「池田光政展」（鳥取県立博物館）で紹介されていた。「この内容に従えば、備前が『手先の国』であり、

幼少の光仲には治めがたいとする国替えの命令は、幕府の恣意的な判断ではなく、家老衆からの申し出が、その発端だったことになる。」(『鳥取入府400年 池田光政展』一〇〇頁)。大公儀と国持外様大名家の関係をしる新たな情報である。

- (29) 坂本敬司「鳥取藩家老制度の成立過程」(『鳥取藩研究の最前線』三三頁)。

- (30) 本来、この意味を確認すべきであるが、別の機会におこないたい。  
(31) 成立がことなる資料を合せての分析に無理があることは承知している。成立時期が同じ頃であり、現時点では適切と考えている。問題点については表2の注\*\*を参照していただきたい。

- (32) 『鳥取県史 三 近世政治』(鳥取県、一九七九年、一七四頁)、河手竜海「鳥取藩における荒尾手政治の研究」(『鳥取大学教養部紀要』(四巻、一九七〇年))。

- (33) 『鳥取藩政資料目録』八〇四九。「当資料は各藩士ごとにその給所の村名と高を記載したものである。台帳として実際に利用されており、変更のあった際には貼紙などで修正が行われている。したがって記述内容は弘化二年以後のものも含む。同様の資料に天明四年のものが現存し、修正が多くなったためそれに代わるものとして当資料を新たに作成したものと思われる。知行高には「高」と記される場合と、「朱」と記される場合があり、前者が拝領高をもとにする数値、後者は朱高をもとにする数値で記される。後者は一村全体が一人の給人に与えられる場合にみられる。」(『日本歴史地名体系 鳥取県』文献解題)。

- (34) 山中寿夫氏は、鳥取池田家中の地方知行制度を「単なる中世的  
地方知行の残存形態を示すものでなく、明暦三年に変質をとげたときに性格づけられたところの、いわば幕藩体制下における藩の支配機構を支えるように再編成された、近世的な地方知行形態である」(幕藩体制下における地方知行の性格について)、『史学研究』(七二、広島史学研究会、一九五九年、四九頁)とされる。  
(35) 山田洋一「近世「領国」「非領国」社会比較史論」、白川部達夫「石高知行割をめぐる諸問題―分散・散りがかり・ならし」(『近世社会と知行制』)。

- (36) 『東郷町誌』(東郷町、一九八七年、二九七頁)。

- (37) 「九三 給人吉田三右衛門借銀につき村方書入証文控」(『東郷町誌』(東郷町、一九八七年、九一八頁))。

- (38) 山中寿夫「幕藩体制下における地方知行の性格について」。

- (39) J・F・モリス『近世日本知行制の研究』(清文堂出版、一九八八年)。同ほか編『近世社会と知行制』(思文閣出版、一九九九年)等参照。

- (40) 因・伯の寺社の領地形態(朱印状による等)の分析は行っていない。

- (41) 「藩内着座家(家老)のうち数家に対し、藩主がその預け地とくに町政を委任した形態を自分手政治と称した。(中略)自分手政治の初期の意図は領内の重要拠点を固めることであった。(後略)」(『鳥取県大百科事典』(新日本海新聞社、一九八四年))。  
河手竜海「鳥取藩における荒尾手政治の研究」、坂本敬司「米子



- 組士と荒尾家臣団」(『鳥取地域史研究』二、二〇〇〇年)、大嶋陽一「筆頭家老荒尾家の自分手政治」(『中国地域の藩と人』(中国地方総合研究センター、二〇一四年))。
- (42) 『鳥取藩史 二(職制志)』(鳥取県立図書館、一九七〇年)、「鳥取藩の職制表」(『特別展 鳥取藩32万石』三一頁)等から作成。
- (43) 石井良助、服藤弘司編『幕末御触書集成一』六、別巻(解題)、別巻(事項目録 編年目録) (岩波書店、一九九二―一九九七年)。
- (44) 『幕末御触書集成 別巻編年目録』の天保一三年分。
- (45) 「江戸幕府官撰の法令集の通称。当時は御触書とよんだ。(中略)最初のもものは8代將軍吉宗の命で編纂され、1615(元和1)以降1743(寛保3)までの諸法令を部類分けの上年代順に収録。44(延享1)に完成。(中略)その後、宝暦・天明・天保にも以後の法令をほぼ同様の基準で編纂。」「(『岩波日本史辞典』(一九九九年))。
- (46) 『幕末御触書集成 別巻解題』一三五頁。
- (47) 『幕末御触書集成 第一巻』序言i頁。
- (48) 天保一三年年末発布の触は遠隔地には翌年に伝達されることになるが、管見では同一四年の触留等には確認できなかった。
- (49) 「仰出之留 天保13―弘化4年(画像)」(国立公文書館デジタルアーカイブズ)。
- (50) 「町触」(『国史大辞典』)。
- (51) 前同。
- (52) 「幕府編纂『御触書』では、実際は別として、『手限町触』、『手限申渡(達書)』は収録しない建前であった。しかし、『幕末集成』ではこれに拘束されず、必要としたものは、『手限町触』は勿論『手限申渡』をもむしろ積極的に収録した。」(『幕末集成』解題 一四一頁)。
- (53) 坂本忠久氏(『都市の『触』より見た天保改革の特質』二〇頁)によれば、天保六年(一八三五)以降については比較的容易に惣触と町触を区別することが可能とのことである。本稿では幕末集成を課題はあるが公儀触として区別は行っていない。
- (54) 近世史料研究会編『江戸町触集成 第一―二二巻』(塙書房、一九九四―二〇一二年)。正保五年(一六四八)―慶応四年(一八六八)の町触を「正宝事録」、「撰要永久録」等を底本にして収録。
- (55) 「町組を除いた地域(洛外)の民政を担当するとともに、洛中洛外の治安警察的任務も担っていた」(『江戸幕府大事典』(一六九頁))。
- (56) 京都町触研究会編『京都町触集成 第一―三巻・別巻一―三』(岩波書店、一九八三―二〇一七年)。京都の町に布達された触をできる限り蒐集し、校訂を加えたうえ、編年翻刻したもので、底本は、第一に、上京町代であった古久保家伝存の触留(京都府立京都学・歴彩館蔵)、第二に上良組衣棚町(上下)に伝存された触留(前同)等であった(同集成凡例)。
- (57) 服藤弘司氏が紹介されている金銀通用令(享保六年四月、寛保



集成一八一八、仰出之留享保4―7〔内閣文庫〕の「書付渡り方」の関係部分「一京都 是ハ松平伊賀守（忠周、所司代）参府二付、直々渡之 書付之上ニ 京都町奉行、伏見奉行、奈良奉行江も可被相達と調之、」とあるによる。

- (58) 「仙台銭撰出之儀組合仲間停止後も是迄通之事」幕末集成四一〇六、京都集成通番五八二。

- (59) この触の伝達の事情は複雑であるが、天保一三年に関しては老中水野忠邦の指示によるものとのことである（坂本忠久「都市の『触』より見た天保改革の特質」二三頁）。

- (60) この二種類に関しては、「表一京都における江戸触の分類」（坂本忠久「都市の『触』より見た天保改革の特質」二二頁）が参考になるが、今後の課題としたい。

- (61) 京都府立京都学・歴史館蔵古久保家文書内。同館HP「京の記憶アーカイブ」内のデータベース「京都町触インデックス」、「京都町触集成 別巻一」に集録されている。今回の分析は前者に拠っている。

- (62) 四触は、幕末集成三二八三「佐久山宿等人馬賃銭割増之事」、同三二八五「房川渡船賃銭割増之事」、同五一九一「異国船取計方改正二付警衛向取調之事」、同三二八六「長窪宿人馬賃銭割増之事」である。

- (63) 「近世『徳川領国』における山城国の構造」（京都総合資料館紀要）三六、二〇〇八年）。

- (64) 前同六三頁「表6 江戸触内容一覧」。

- (65) 別稿表6には「洛中洛外98」としているが、残り六四触は方内の触頭の雑色名、京都町奉行名の記載、触の内容などから「（洛中）洛外」と判断した数である。

- (66) 京都町奉行所中継の触が京都集成にも対応している場合、山城国への発給月日と同集成の触のそれとを七〇触について確認したが、同集成では、子の誕生、また命名の触、その他鳴物停止の触がほぼ一致していた。その他は数日のずれ、ないしは月のみであった。ほぼ同じ頃と判断できる。

- (67) 「山城國中触頭被仰付、慶長六丑年六月京都四條室町の辻より四方四座江支配被仰付候段、所司代板倉四郎右衛門殿被仰渡」（雑色要録）（『日本庶民生活史料集成 一四 部落』三一書房、一九七一年）。

- (68) 支配国と郡切（限）の関係は、このルートにおいて寺社への洩れの是正を指示する丹波国三之宮村の触留にある寛政三年（一七九一）七月の触の冒頭「京都町奉行支配国々江差出候触書、郡限、寺社、庄屋、年寄宛二而、村々順々相廻り候儀二付、…」（京都府立京都学・歴史館蔵。三ノ宮村は丹波国であるが、同触は山城国へも伝達されている（長岡京市文化財保護課写真帳『辻昭家文書6』寛政三年七月二九日条））によって判断した。

- (69) 藪田貫「『摂河支配国論』―日本近世における地域と構成―」（脇田修編『近世大坂地域の史的分析』御茶の水書房、一九八〇年）。同氏は京都町奉行支配国を京都の社会経済的基盤と指摘されている。拙稿でも同氏の指摘を受けて皇都（京都）の社会経済的

基盤とみている（「触にみる近世『徳川領国』内丹波国の構造」〔京都府立総合資料館紀要〕〈三八、二〇一〇年、二七三頁〉）。この支配国は事例が少ないためあまり認識されていないように思われる。『京都御備』としての安政期の湖北通船路開鑿事業―彦根藩と小浜藩との対立を軸とした通説の根本的再検討を通じて―（『人文学報』一〇四（京都大学人文科学研究所、二〇一三年、八―九頁））で支配者側の認識がふれられている。

- (70) 山田洋一「近世『徳川領国』における山城国の構造」(七五―七七頁)によれば、領主公家、寺社、旗本等の自領への触伝達については、確認例は少ないが、行われていない。ただし、勘定所からの酒造関係の指示については時に領主として対応している。本来、山城国の小領主は触の伝達、酒造関係調査等は京都町奉行所が代行するようになっていたようである。

- (71) 初代高虎が家康に臣従していたため徳川領国に属するとしている。

- (72) 旧高より。

- (73) 山田洋一「近世『徳川領国』における山城国の構造」(七八頁)。

- (74) 「触にみる近世『徳川領国』内丹波国の構造」表3・4。

- (75) 東から田辺（現舞鶴市）牧野家、宮津本庄（松平）家、峰山京極家である。京極家は一般的には外様とされているが本稿では譜代としている（山田洋一「丹後国のまとめ」と『徳川領国』〔上山純一編『丹後地域史へのいざない』（思文閣出版、二〇〇七年、七五頁）〕）。

- (76) 『久美浜代官所関係史料集』（京丹後市、二〇一四年、四四頁）。
- (77) 『図説京丹後市の歴史』（京丹後市役所、二〇一二年、四〇頁）。
- (78) 神谷神社所蔵太刀宮文書四五三\*。\*番号は「神谷神社保管文書目録」（『丹後漁業関係古文書目録』（京都府教育委員会、一九九四年））による。

- (79) 京都府立丹後郷土資料館寄託「西原家文書」（近世文書E1）。
- (80) 幕末集成に対応している触は同集成の触名（番号）で、その他は要約で、次のとおりであった。一「問屋組合再興ニ付素人直売買制禁之事」（幕末集成四三二〇）、二「今須宿等人馬賃銭割増之事」（同三三四八）、三「主人等殺害之九兵衛人相書之事」（同五〇四八）、四「養母殺害等之太四郎人相書之事」（同五〇四九）、五「人相書之松五郎召捕ニ付尋ニ不及之事」（同五〇四七）、六「天竜川渡船賃銭割増之事」（同三三五一）、七「朝鮮信使来聘延引之事」（同六〇〇六）、八「古金銀等引替残早々可引替之事」（同四一四六）、九「唐物抜荷取締之事」（同五〇七五）、一〇「武家寺院之輩鉢植物売買ニ拘問敷之事」（同四〇五五）、一一「老朱銀吹立ニ付通用并両替心得之事」（同四一五〇）、一二（紀伊一位殿逝去につき鳴物停止等）、一三（上総、下総の御宮其ほか諸末船及大破候につき勸化）、一四（御男子様御誕生につき松平長吉郎殿と称す等）、一五（火之元取締につき武家屋敷にても入念のこと）、一六（中山道長窪宿等賃銭割増）、一七（火之元のため屋敷水溜桶差置くこと）、一八（妙法院宮御抱三拾三間堂及大破につき勸化御免、寄進等のこと）、一九（公

方様薨御につき鳴物停止等)、二〇(東海道酒匂川川越人足賃錢等割増のこと)、二二(京都表和糸絹問屋再興につき)、二二(禁裏炎上につき鳴物停止等)。

(81) 嘉永五年三月八日条、幕末集成四三二〇。

(82) 嘉永六年四月二日条、江戸集成一五三二五。

(83) 「一久美浜御代官野村権九郎様奥州福嶋蚕飼種御取寄被遊、旧年より御料所へ被 仰付候、右二付御当所も糸商売いたし候儀、当御役所へ御配分有之候由二而相心見可申段被仰渡、并町場ニも少々宛蚕飼いたし候ものも有之由、先半枚残し置候二付、早々其段相触候様ニ被仰付候而、蚕飼之儀ニ付仕法御申渡御書付ケ別御帳面壹冊被遊御渡候」(京都府立京都学・歴彩館収集マイクロフィルム『旧峰山町役場所蔵文書8寛政十年御用諸事記』一月一三日条)。この幹旋に五人が応じている(同二月二日条)。

(84) 『鳥取藩政資料目録』四一〇六、堅帳一冊。「幕府からの触書・通達の文言を記録する。表題は記されず、小口に『触』とある」(同目録三二五頁)。

(85) 「留守居」の呼称については変遷がある(『鳥取県史 第二巻 職制志』一一頁)。

(86) 『鳥取藩政資料目録』三五七〇(天保一三年八月―九月)、堅帳一冊。表題なし。「江戸御留守居役は、『御聞役』とも言い、江戸で幕府・諸大名との交渉・連絡に当たる。その公務日記である。」(同目録二七七頁)。

(87) 『幕末御触書集成 別巻 解題』(三一八頁)。

(88) 前同三一七頁。

(89) 前同二三七頁。

(90) 前同二八三頁。

(91) 『鳥取藩政資料目録』二七九八、堅帳一冊、原表題「控帳」。「江戸詰家老の公用日記。国元の家老日記(控帳)に相当する。表紙に『御国江申遣日記写』・『江戸来状帳』・『從江戸之日記写』と記されたものは、江戸詰家老から飛脚に託されて国元へ送られた日記を書き留めたもの、『日記』と記されたものは、江戸で記されたものと考えられ、記載内容はほぼ同一である。」(『鳥取藩政資料目録』二五八頁)。

(92) 『鳥取藩政資料目録』五八五六。三分冊となっている。

(93) 人数は三〇四名程度、内一人は江戸詰め、国元家老は月番で担当、着座の家格の一〇家の中から、適任者が任命された(『特別展 鳥取藩32万石 図録』三一頁)。坂本敬司「第一章 鳥取藩家老制度の成立過程」(『鳥取藩研究の最前線』)。

(94) 『鳥取藩研究の最前線』(添付CD収録二の丸関係絵図トレース図)。

(95) 『特別展 鳥取藩32万石』三一頁。

(96) 『鳥取藩政資料家老日記テキストデータベース』(鳥取県立博物館HP)による。「公儀」「公義」「御触」「江戸」等キーワードにして検索を行った。「底本の『家老日記』は、藩政を統括した家老の元で作成された公務日記で、表題には「控帳」と記載されている。また別に『御櫓日記』とも呼ばれる。1655(明

暦元) 年から1870 (明治2) 年までの250冊が、ほぼ年次をおって伝存する。江戸時代における鳥取藩の歴史や藩の構造を探究していくうえで、最も基礎となる資料である。」(同データベース解説より)。

- (97) 二月七日条の「於在々芝居等嚴重制禁之事」(幕末集成四七四四)、天保一二年の触のため別表に記載はない。

- (98) 「自分手政治」(『鳥取県大百科事典』)。

- (99) 「荒尾家御老役御触控写」(新修米子市史 八 資料編 近世Ⅰ「米子市、二〇〇〇年」)。

- (100) 「御目付日記 天保13年9月—10月」(『鳥取藩政資料目録』五三九、竖帳一冊)。

- (101) 「鳥取藩政資料目録」八六二七(表紙「天保九年より同十一年迄巻 同十二年より同十三年迄巻 右合巻(貼紙「拾九番」一部開封不可)。

- (102) 「鳥取藩政資料目録」四七一八。九月一六日条は、飛脚が到来、御用向は別帳に記載したなどの記事である。

- (103) 大坂蔵屋敷に結めて、年貢米の販売や大坂城代との交渉を行う(「特別展 鳥取藩32万石」三四頁)。

- (104) 「武士屋敷ニ而博奕等制禁并召捕方之事」(幕末集成五〇〇七)。これは大坂蔵屋敷への達しであるが国元へも伝達されている。ほかに別表の幕末集成四二七・五〇〇九がある。

- (105) 「在吟味役」(『鳥取県大百科事典』)。

- (106) 「在御用場」(『鳥取藩史 2 職制志・禄制志』一七四頁)。

- (107) 「鳥取藩政資料目録」七八九〇。竖帳一冊。「在方を担当する在御用場の日記。表題は『諸事控』と記されるものがほとんどで、

基本的には1年1冊に纏められる。1年が複数冊からなるものは、後の分冊による。残欠を除くほぼ全文が『鳥取県史』近世資料篇9—13に翻刻されている」(同目録二四七頁)。ただし、天保一三年分は翻刻されていない。本稿は原本に拠る。

- (108) 公儀触の領民への影響については、衣類に関して西村綏子氏がすでに明らかにされている(「江戸時代における衣服規制について—鳥取藩の場合—」(岡山大学教育学部研究集録)三三、一九七二年)。\*大嶋陽一氏の御教示による。

- (109) 「鳥取藩政資料目録」八六一八、竖帳一冊。「郡代・郡奉行が在へ触れ出した法令の控。原表題は『御條目控』」(同目録三三三頁)。

- (110) 来見田博基「鳥取藩町奉行の文書管理と引き継ぎについて」(『鳥取地域史研究』八、二〇〇六年、二九頁)。

- (111) 「特別展 鳥取藩32万石」三二頁。

- (112) 来見田博基「鳥取藩町奉行の文書管理と引き継ぎについて」三〇頁。

- (113) 「鳥取藩政資料目録」五九三四(「表紙に上山六兵衛・野間半右衛門・溝口半五郎の名あり」)・五九三五(「表紙に上山六兵衛・溝口半五郎の名あり」)。各竖帳一冊。「鳥取町の町政を担当した町奉行の日記。表題はいずれも『御用日記』で、その下に町奉行の名前が記される」(同目録二二九頁)。

(114) 『鳥取藩史 第2巻 職制志・禄制志』一七〇頁。

(115) 大嶋陽一「鳥取藩の大庄屋制について―近世中期を中心に―」

『鳥取藩研究の最前線』二四〇頁。

(116) 大庄屋を勤めた家の歴史を通じて大庄屋と地域社会の実態が紹介される坂本敬司『鳥取県史ブックレット18 大庄屋と地域社会 ―笠津村河本家文書が語るもの―』（鳥取県、二〇一六年）等参照。

(117) 寺社、根帳、五人組、宗門改めなどを担当したが、次第に大庄屋の補佐役として郡政全般に関係した。定員は構ごとに一名であったが、安政五年（一八五八）に廃止された（『東郷町史』二六〇頁）。

(118) 給人の知行米の世話をする役職だが、多くは庄屋が兼任した（『東郷町史』二九八頁）。

(119) 幕末集成の子番号の触に対応する触も数えての数値。

(120) 鳥取県立博物館蔵岩井郡銀山村文書一。仮目録では「1、書状入念之分ハ書写シ置覚帳、天保十一年十二月―十五年四月、横帳一冊」。文書封筒の書名は「御用状写」となっており、この書名を本稿では採用し、「銀山村御用状写」としている。同文書の総点数は一二四五点。

(121) 幕末集成記事の年月日。

(122) 郡奉行（『家老日記データベース』天保一三年九月七日条）。

(123) 在御吟味役（前同）。

(124) 大庄屋（『付（三）岩井郡大庄屋・中庄屋・宗旨庄屋一覧』（『岩

美町誌』（岩美町、一九六八年、二五〇頁））。

(125) 大庄屋（前同\*重左衛門とあり）。

(126) 他の時期にこの地域の大庄屋を勤めていた中嶋家の御用日記の一部が翻刻されている。「鳥取県立博物館研究報告」四九（二〇一二年）・五〇（二〇一三年）・五一（二〇一四年）・五五（二〇一八年）。

(127) 「一一八 荒尾家御老役御触控写」（『新修米子市史 八 資料編 近世I』（六〇〇頁））にも記載あり。

(128) 在方諸事控六月二七日条。「武術稽古奨励并武芸免許授与心得之事」（幕末集成三〇三九）に関して「但し、御郡奉行江者、触口江申渡し之儀無之ニ付、御山奉行江者不相触事」とあることから在方へは伝達しないと判断した。

(129) 幕末集成未対応は除く、重複は集約、子番号は親番号に集約して整理等を行った。対応する幕末集成の番号は、七七・二二八・四〇三九・四〇六八・四〇六九・四〇九五・四一〇〇・四一五五・四一六四・四一六五・四一八一・四一八二・四一八三・四六二八・四七二五・五〇六〇・五〇七三・五〇八六・五二〇七・六三〇八である。収録している資料は、いずれも鳥取県立博物館の所蔵で、「岩井郡銀山村山口家文書 一 御用状写」、「同 一五 公儀御触書写し（一・三・四・五）」、「同 一六 古文字金引替ニ付御触」、「同 一七 通用銀吹直御触写」、「気多郡八葉寺村植田家資料 三七 御触状写」、「同 三八 御触状写」、「高草郡植原村加藤家文書 二 従公義御触写」である。



- (130) 「古文字金早々可引替之事」(天保十一年、幕末集成四〇九五)の触先は記載なしであるが、幕末集成の同触の出典が「柳間席大名家の編纂にほぼ間違いない」(幕末集成解題三九〇頁)とされる幕令類編(内閣文庫)であることから全国触の可能性は高い。「此度吹直被仰付候銀引替方心得之事」(安永六年、幕末集成四一八二)、「外国銀錢通用方并於銀座極印打渡之事」(同年、同四一八三)の触先は「右之通可被相触候」である。後者二触は「通用銀吹直ニ付両替等心得之事」(同年、四一八一、触先は「国々江可触知もの也」と一括されて銀山村へ伝達されていることから、全国触の可能性が高いと思われる。
- (131) 池内敏「第五章 江戸の鳥取藩―光仲・綱清期における―」(『鳥取藩研究の最前線』)。
- (132) 稲葉継陽・今村直樹編『日本近世の領国地域社会 熊本藩政の成立・改革・展開』(吉川弘文館、二〇一五年、六頁)。
- (133) 笠谷和比古「『国持大名』論考」(四五二頁)。
- (134) 『IV将軍政治の権力構造』(『朝尾直弘著作集 三』(岩波書店、二〇〇四年、二五〇頁) \*初出(『岩波講座日本歴史 一〇』岩波書店、一九七五年)。
- (135) 今野真「『土芥寇讎記』と大名論」(『近世社会と知行制』五三頁)。また、国持、譜代大名については、高野信治氏が紹介(『近世大名家臣団と領主制』(吉川弘文館、一九九七年、四〇〇頁)とされている御三家の一つ尾張徳川家吉通(在任元禄一二(一六九九)～正徳三年(一七一三)の見解「国大名といふは、小身にても、公方の家来あいしらひにてなし、また御譜代大名と云は、全く御家来也。三家之者は、全く公方の家来にてはなし」(『円覚院様御伝十五ヶ条』(『名古屋叢書 1 文教編』名古屋市教育局、一九六〇年、三三頁)がある。譜代大名の自意識(我が身我が家を忘れてひらすら忠義に勤めなければならない)については拙稿「近世『徳川領国』の所領構成と譜代・外様・国持」(二三頁)を参照。
- (136) 朝尾氏は、大坂加番役の研究(『IV将軍政治の権力構造』(『朝尾直弘著作集 三』注51)から中小の外様大名が動員され譜代並の主従関係が確定される研究を確認されている(前同二六六頁)。公家、寺社等は公儀触の伝達は行っていないが、領主として酒造について勘定所からの指示に従っていることからここに含まれるとする。公家、寺社等の領主については公儀、朝廷との関係を含めてその在り方は今後の課題としたい。
- (137) 別表のうち御料、私領などの触先文言から、幕末集成八一・四一〇・四一三・四一六・四二八・四四〇・四七五・四七六・五一二・五二三是全国触としているが、当時においても「天下一統の御法度の範囲確定を困難にした最大要因として、幕府為政者間にも、その範囲につき確たる定見がなかった」(『幕府法と藩法』三二頁)ことが指摘される。このように判断は困難である。いずれにしても全国触(令)、天下一統の御法度は本稿で行ったように、村町までの各階層ごとに伝達を確認しなければ確実なところはわからないのではないと思われる。

(138)

公儀触の分類には、藤井讓治氏の「幕令」を『全国令、幕領令、町触（江戸町触）』に分類する方式（『幕藩領主の権力構造』（岩波書店、二〇〇二年、一六二頁））、服藤弘司氏の「幕府法は、天下一統の御法度（中略）と御料法の二者に大別できる。石井良助氏は、前者を統一的幕府法、後者を領主的幕府法と呼ぶが、これらの呼称からも窺えるごとく、前者は、将軍が武家の棟梁として諸大名を統轄し、全国的支配権を遂行するために発した法であり、これに対し、後者は、将軍が一領主（一大名）として、幕府直轄地（御料）支配を行うため発した法である。」（『幕府法と藩法』（創文社、一九八〇年、一八頁））とする方式、その他「触書には幕府直轄領たる御料（天領）だけを対象としたものと、全国的なものがある。倫理、宗教、外交、貿易、貨幣、交通、度量衡、酒造等は全国法であったが、田畑永代売買禁令や慶安御触書は御料だけのものではあった」（平松義郎（『世界大百科事典』）、「幕府が、武家の棟梁、全国支配者として大名に遵守を命じたいわゆる天下一統の御法度は、幕府の重要施策とされたキリシタン禁制・鎖国令・拔荷（外国密貿易）取締令・人身売買禁止令・田畑永代売買禁止令などと、全国統一的でなければ支障をきたす金銀通貨・度量衡・宿駅駄賃などに関する法に限定された。（服藤弘司「藩法」（『国史大辞典』））などがある。これらを参考にして全国触（全国令、天下一統の御法度）とその他触に分類することにした。全国触の定義は困難であるが、一応触先が全国的なものとしている。

(139)

中川学氏は、江戸、京都に伝達されたいわゆる鳴物停止触から各地域の關係する社会構造を分析されているが、同触を「鳴物停止（全国令）」とされている（『江戸幕府「鳴物停止令」の展開とその特質—近代前中期における江戸触を中心に』（『歴史』七九、一九九二年、四七頁）。今野真氏も同触を「全国に通達」とされている（『幕藩体制下の生活規制—鳴物停止令と禁字—』（『宮城歴史科学研究』三八、一九九四年、一九頁））。

(140)

中川学「江戸幕府『鳴物停止令』の展開とその特質」五〇頁。

(141)

例えば、丹後国峰山京極家領へ伝達された明和二年（一七六五）の公儀触①「長崎湊え入津船より浚入用石錢取立之事」（御触書天明集成三〇一五）、②「官金返済不法催促并高利取締之事」（御触書天明集成三〇七五）を「大公儀御触書」として峰山の町役人が書きとめた記事（『明和三年御用諸色之控』正月二三日条（『峯山藩関係史料集』一〇八頁））がある。①は内容、触先も全国触である。②は触先が「右之通町奉行より相触候間、向々江寄々可被相達候」とあり、一端江戸にかかわってから「向々（諸方面）」へ「寄々（よりより（時々））」と発給されたもので全国触といえない。この場合の大公儀は領主京極家の公儀より上の公儀（徳川公儀）という意味での認識と判断される。

(142)

石井良助氏が「『御触書集成』は、幕府の法令を網羅したものではなく、他面、江戸の町触やまた法令とはいえない一時限りの行政的処分の書付も含まれていて、やや雑多な観を呈する」（『御触書集成』『国史大辞典』）と述べられているのもこのためと考え

れる。

(143) Bルートのうち郡切方式は京都町奉行支配国の一機能とした。

本稿では同支配国は數田貫氏の指摘を受けて京都（京都）の社会経済的基盤（「触にみる近世『徳川領国』内丹波国の構造」二七四頁）とみており、このルートはその基盤維持強化のためと考えている。

(144) この頃の給人の触との関係については山中寿夫氏の指摘「衣類

その他に関する法令を給所百姓に徹底させなくてはならなかった（御家中御法度〈鳥取藩政資料\*本稿注〉慶安四年二月八日）」（幕藩体制下における地方知行の性格について）四〇頁）があり、触の伝達をなんらか行っていたことが知られる。明暦二年（一六五六）の改変以前は給人も触の伝達を行っていたことがこれより判断される。

(145) 改変の内容とは「鳥取藩の知行制度が単なる中世的地方知行の残存形態を示すものでなく（中略）いわば幕藩体制下における藩の支配機構を支えるように再編成された、（中略）また給人と給所との間の有形・無形の繋りの可能性を内蔵することによる給人家臣団の経済的な存立基盤としての役割を果たした。」（山中寿夫「幕藩体制下における地方知行の性格について」四九頁）である。

(146) 「所有」の分離については、元禄十一年（一六九八）から実施された請免制が考えられる。この制度はいわゆる検見法（土免制）であったのが定免制となった制度であるが、年貢の取立が全面

的に大庄屋に任されていた（「請免制」鳥取大百科事典）。村等側に分離していると判断される。

(147) 両領国の違いとして、J・F・モリス氏によれば、「仙台藩」の

陪臣は地方知行の事実があっても明治九年（一八七六）の秩禄処分過程では領主として認められていないが、旗本の家臣は知行権や俸禄を原則的に認められていたと指摘されている。「將軍」との距離が違いを生じさせていたのである（『近世日本知行制の研究』清文堂出版、一九八八年、三二六頁）。

(148) これまで機会あるごとに作成したが、領主の表示、分類など不統一であったため、今後は一括して再作成したいと考えている。

(149) このように考えていたところ、大嶋陽一氏より給人だった梶川正温の懷古録「喜字のくり言」（『新修米子市史 十五 資料編 近世近代補遺』米子市、二〇一〇年）の教示を得た。

(150) 福田千鶴氏は近世初期の「公儀」を論述した最後に注（『岩波講座日本歴史 第一〇巻 近世Ⅰ』岩波書店、二〇一四年、注七七）で「J・F・モリスは、『地方知行制形骸化』論に再検討を促し、給人領主を組み込んだ領主制論の必要を提起している（『前略』『近世社会と知行制』（後略））」と述べられている。水本邦彦『徳川社会論の視座』（敬文舎、二〇一三年、ブックカバー）。

(151)

別表 『幕末御触書集成』（天保13年）と徳川領国（江戸・京都・丹後国）・国持外様領国（因・伯）公儀触対応表

a b c			d	e	f	g	h	I	j	k	l	m
基軸触				徳川領国			国持外様領国					
				江戸	京都	丹後	因幡・伯耆国					
『幕末御触書集成』（天保13年）				町	町	村	家中 (江戸)	家中 (鳥取)	村			
部立	通番号	触名	被仰出之留	江戸町触集成	京都町触集成	郡中代日記	公儀御触控	江戸家老日記	家老日記	在方諸事控	町奉行御用日記	銀山村御用状写
1 御改革法令之部	24	物価引下方并隠売女取締等之事										
2 殿中席書席順之部	67	御裏方様御順之事					○	○				1
3 禁裏向并勅使之部 *ほか1触	136	堂上方学習所創建之儀朝廷より申入之事										
4 御転任御兼任御官位御祝儀之部	492	広大院様従一位勅許之事					○	○				2
	493	一位様御加階ニ付御祝儀之事					○	○				3
	493	一位様御加階ニ付公方様等江献上物之事					○					4
	494	一位様御加階ニ付献上之節心得之事						○				5
	494	一位様御加階御祝儀之節下馬所之事						○				6
5 御転任御兼任御官位御祝儀之部	495	一位様御加階御礼等ニ付京都江播磨守御使之事										
6 御呼称之部	529	広大院様呼称之事		○				○				7
7 定式御祝儀等之部 *ほか2触	553	公方様西丸江御成ニ付仕出之面々西丸江罷出ニ不及之事					○					8
8 臨時御祝儀等之部 *ほか4触	674	姫君様誕生之処表向御弘不被仰出等之事		△*			○		○	○	○	9
	675	精宮御養女被仰出ニ付御祝儀之事					○	○				10
	677	精宮呼称之事		△			○					11
	678	精姫君様御取かはし差上物等姫君様並之通之事					○	○				12
9 献上物之部	778	鮮鯛贈来候面々代金員数之事					○	○				13

10	日光山能東叡 山御宮御霊屋 等之部 *ほか2触	811	日光御宮修復ニ付諸色直段引上間敷之事							○	○						14
11	御法事并鳴物 停止御機嫌伺 等之部 *ほか6	1086	円台院宮忌日変更之事							○							15
		1087	文恭院様御法事中評定所勤方等之事							○							16
		1087	文恭院様御法事日割之事							○							17
		1087	文恭院様御法事中為御機嫌伺献上物之事							○							18
		1087	文恭院様御霊前御参詣供奉行列等之事							○							19
		1087	文恭院様御霊前御参詣等之事							○							20
		1087	文恭院様御霊前御参詣行列之事							○							21
		1090	文恭院様御霊前右大將様名代之事							○	○						22
		1091	文恭院様御法事相済候ニ付惣出仕之事							○	○						23
		1092	御表出御無之候之事							○							24
		1093	月次御礼有之候之事							○							25
		1094	貞明院様御法事日割之事							○	○						26
		1095	讃岐守卒去ニ付御簾中様御忌服之事							○	○						27
		1096	香琳院様御法事日割之事							○	○						28
		1096	香琳院様御法事中評定所勤方等之事							○	○						29
		1097	香琳院様御法事中表向之面々参詣ニ不及之事							○	○						30
		1097	香琳院様御法事中為御機嫌伺献上物之事							○	○						31
		1099	延姫死去ニ付公方様等御遠慮之事							○	○						32
12	寺社之部 * ほか4触	1542	鴻巣勝願寺勧化之事							○	○						33
		1544	御霊屋向盆中御灯笼献上備ニ付心得之事							○							34
13	上知村替并御 預り所之部	1652	代官場所替等十ヶ年未満不可伺之事														
14	諸国巡見并御 国高改其外人 別改之部	1685	出家社人等町家住宅其外之儀取締之事		○	○				○							35
		1686	神職修験共市中住居引払延引之事		○												36
15	御代官御預り 所役人江被仰 渡等之部 * ほか8触	1751	諸伺諸手形以来表紙二不及之事														
16	日光御社参并 自拝等之部 *ほか36触	1813	日光御参詣被仰出候ニ付御祝儀之事		△					○	○						37
		1820	日光御参詣ニ付諸色直上制禁之事							○	○						38
		1834	越前守等日光江相越候留守中御用向 取計方之事							○	○						39
		1835	日光御参詣ニ付諸色高直二致間敷之事		○	○											40
		1842	日光御参詣之節御成道筋人留等之事							○							41
		1842	日光御成道中筋江使者等差出無用之事							○							42
17	御鷹方之部 *ほか1触	2026	御鷹餌鳥納方請負并餌差取締等之事		○												43
		2029	無印之水鳥壳買致間敷之事		○												44
18	殺生之部	2051	神田川魚獵差留場所之事		○					○	○						45
19	上覧上聴之部 *ほか1触	2127	管弦被仰付ニ付楽人共江申渡之事														



20	殿中向并着服之部	2175	御座敷向畳庇付不申様可心懸等之事														
21	御門番勤方等之部	2227	御門々通行入念二可改之事														
22	御城内外供廻り等之部*ほか3触	2272	諸家使者等召連候若党共風俗節儉之事					○									46
		2275	御三家方等町方通行之節商ひ物取入方之事		○												47
23	辻番之部	2351	仲間組合停止二付組合辻番請負勝手次第之事														
24	諸役人組支配勤方等之部*ほか17触	2432	両御番所組之衆自身番屋二而下駄等借用之節引合候印鑑紙差出之事		○												48
		2445	加役方捕方之触自身番屋江張出之事		○												49
25	諸役人組支配勤方等之部	2448	佐渡奉行以来老役其地在住之事														
26	御役被仰付并人召抱等之部*ほか2触	2672	本嶋八右衛門等評定所使之者過人之事														
27	諸家家来心得方并御用頼之部*ほか5触	2905	諸家家臣用候駕籠并長柄心得之事														
28	養子跡目縁組之部*ほか1触	2964	御譜代者より御抱者方江養子差遣之儀制禁之事														
29	聖堂学問所蕃書調所并医学館之部*ほか3触	3039	武術稽古奨励并武芸免許授与心得之事						○	○	○	○					50
30	鉄炮砲術稽古并人数調練等之部*ほか1触	3111	高嶋四郎太夫火術諸家江伝授勝手次第之事						○	○							51
		3113	諸家屋敷二而鐘太鼓音入稽古等改而可伺之事						○	○							52
31	医師之部	3240	医師之供方風儀取締之事			○											53
		3241	女医師墮胎之儀取締之事		○	○											54
32	人馬賃銭其外道中筋之部*ほか1触	3282	関宿等人馬賃銭割増之事					○									55
		3283	佐久山宿等人馬賃銭割増之事	○				○									56
		3284	千曲川川越賃銭割増之事	○		○											57
		3285	房川渡船賃銭割増之事	○													
		3286	長窪宿人馬賃銭割増之事					○									58
		3287	江戸より神奈川宿辺迄之船往来差留之事		○												59
		3289	酒匂川川越人足賃銭割増之事	○													60
33	武士屋舗之部*ほか2触	3449	万石以下為武備手当町屋敷所持不苦之事					○	○								61
		3450	万石以下所持之町屋敷屋敷改江届出之事		○												62
		3451	武家其外内実所持之町屋敷等取調之事		△												63
		3454	屋敷坪数并所付屋敷改江差出之事					○									64
		3455	屋敷之内を町人等二貸置候儀制禁之事		○			○	○								65

34	町屋舗之部 *ほか3触	3483	河岸地建物之内火焚所引払之事		○												66
		3484	町入用減方之御趣意不可取失之事		○	○											67
		3485	家主共樽代節句錢等受取候儀制禁之事		○												68
		3487	市中沽券金高引下方取調ニ付心得之事		○												69
		3488	町屋敷売買之節過分之入用掛間敷之事		○												70
		3489	町々家作土蔵造塗家等ニ可致之事		○	○											71
		3490	地面売買等ニ余分之入用掛間敷之事		○												72
		3491	地代上り高其外取調中ニ候共家屋敷譲渡等見合無用并地代店賃滞取締之事		○												73
		3492	市中地代店賃引下方地主勝手次第之事		○	○											74
		3493	明家取払杯之浮説取締之事		○												75
		3494	市中地代店賃引下方心得之事		○												76
		3495	拝領町屋敷等地代店賃引下方心得之事		○												77
		3496	地代店賃引下方兩役所附請負人等江達之事		○												78
		3496	地代店賃引下方町々名主共江達之事		○												79
		3497	町火消其外町入用減省方申合之事		○												80
		3498	家質宿賃歩合引直并仕法改正之事		○												81
		3499	御堀端并河岸附土蔵物置等取計方之事		○												82
		3500	家質仕法改正ニ付名主共心得之事		○												83
		3501	拝領地地先河岸地も地代可差出之事		△												84
35	御普請御作事 其外家作等之部 *ほか1触	3548	普請修復御用新規入札人申付之事														
		3597	兩役所牢屋敷近辺出火之節駆付方之事		○												85
36	火事并火之元 等之部 *ほか1触	3598	町々木戸并自身番屋取計方心得之事		○												86
		3599	風烈之節町中火乏元用心之事		○												87
		3601	火之番防大名等消防出動方心得之事		○				○	○							88
		3602	自身番江品々差遣候奇特之者届出之事		△												89
37	地震并洪水之部	3733	久能御宮地震損之箇所修復之事														
38	御合力被進米 金御切米被下 金并上納金其 外拝借金等之部	3819	下田奉行羽田奉行役高役料席順之事														

39	御貸附并御蔵米取之面々借金済方棄損等之部 *ほか2触	3958	蔵米取江利安貸付ニ付札差共江申渡之事		○												90
		3960	町会所金貸付願出方ニ付心得之事		○												91
40	俵約之部 *ほか3触	4027	時候外れ之野菜等売出間敷之事		○	○		○	○								92
		4028	俵約之処身分相応之普請不苦之事					○	○								93
		4029	高直之子供手遊品売出間敷之事		○	○											94
		4030	時候外れ之野菜類御膳御用ニ而も用間敷之事		▽	**											95
		4032	百姓町人持金銀之品金銀座江差出之儀再達之事		○												96
		4033	高直之石灯笼瀬戸物等売買致間敷之事		○	○		○	○								97
		4036	町人男女御法度之衣類着用致間敷之事		○	○		○	○								98
		4036	万石以上女之衣類価格制限変更之事		○			○	○								99
41	金銀銅銭并出銅古地銅等之部 *ほか2触	4105	町人共貯置候古金銀員数取調之事		○												100
		4106	仙台銭撰出之儀組合仲間停止後も是迄通之事		○	○											101
		4107	市中古金銀以来引替方之事		○												102
		4108	組々古金銀引替日割并引替済届方之事		○												103
		4109	無名之包銀通用致間敷之事		○	○		○	○								104
		4110	似せ金銀銭拵候者并売捌候者取締之事		○	○		○		○	○				○		105
		4111	丁銀向後無銘之包致間敷之事		○												106
		4112	金壹兩ニ付銭六貫五百文替相場之事		○												107
		4113	通用停止之古金銀早々可引替之事		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		108
		4114	両替屋打銭相当ニ引下売買可致之事		○												109
		4116	古金銀等引替残早々可引替之事		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			110
		4117	銭払底ニ付於浅草御蔵小銭引替之事		○												111
42	米穀之部 *ほか1触	4118	銭通用差支無之様名主共世話可致之事		○												112
		4119	両替屋打銭定之事		○												113
		4220	竜助武家収納米引請元米切手払差止之事		○												114
		4221	市中春米屋米直段張出方之事		○												115
		4223	年貢米等金納ニ用候相場立方不埒無之様吟味之事	○	○	○	○	○	○								116
		4233	薬種日方売之儀正味掛可致之事		○	○											117
43	薬種之部 *ほか1触	4234	朝鮮種人参於吹上役所御払ニ付勝手次第可願出之事		○												118

44	諸色値段并諸 商売等之部 * ほか4触	4258	仲間組合停止ニ付湯屋始候者心得之事		○																			119
		4259	忠吉新規髪結床下直ニ始候儀差免之事		○																			120
		4260	与八豆腐直下願之通被仰付之事		○																			121
		4261	宗兵衛炭薪下直ニ売出度願置之事		○																			122
		4262	七右衛門等願之通新規髪結床差免之事		○																			123
		4263	組合仲間等停止之儀遵守方心得之事		○	○		○	○															124
		4264	亀三郎等新規湯屋差免之事		○																			125
		4265	問屋銘目停止付看板等可改之事		○																			126
		4266	諸色直下之趣意行届候様名主心得之事		○																			127
		4267	問屋仲間組合停止ニ付五郎兵衛等桶樽役銭等上納ニ不及之事		○																			128
		4268	武具馬具等直段引下候様可致之事		○	○																		129
		4269	湯屋髪結床張札之儀御趣意之文字為除可申之事		○																			130
		4271	諸職人手間賃等可引下之事		○																			131
		4272	新生姜貝割菜只今迄之通売買不苦之事		○	○																		132
		4274	質屋古着屋等仲間組合停止ニ付渡世向心得之事		○	○																		133
		4275	直下不致分并不実之直下之者取締之事		○	○																		134
		4276	湯銭老人六文ニ引下之事		○																			135
		4277	馬喰馬其外共高価ニ売買致間敷之事		○	○		○	○	○														136
		4278	御用「魚賣」土用中不差支様仮仕法之事		○																			137
		4280	桶町国役銭之儀以来古格ニ可立戻之事		○																			138
		4281	旅人宿新規始候者届出之事		○																			139
		4282	問屋組合仲間停止ニ付青物等納方之事		○																			140
		4283	問屋組合仲間停止ニ付玉子納方之事		○																			141
		4284	桶樽職人共江渡置候木札引替之事		○																			142
		4285	元直段取調差支ニ付商人共帳面認方達之事		○	○																		143
		4286	員数不足之差銭渡候商人取締之事		○																			144
		4287	不正之筋ニ無之前金遣候儀不苦之事		○																			145
		4288	領主地頭ノ売同様之取計致間敷之事		○	○		○	○															146
		4288	荷主船頭共直待と唱ノ売致間敷之事		○	○	○	○	○															147
		4290	御法度之衣類売買禁止并質屋利足等取調之事		○																			148
		4291	紙屑直段引下方之事		○																			149
45	酒造之部 * ほか2触	4387	酒造株改称并引分貸渡等制禁之事					○																150
46	枅秤之部	4398	仲間組合差止ニ付両替屋共江渡置候		○																			151
47	在町掟等之部	4407	店連判取置候儀ニ付家主共心得之事		○																			152
		4408	百姓共風儀并農業等可心得品々之事		○	○	○	○	○															153
48	御取箇筋并田畑作毛等之部 *ほか5触	4452	取立金御藏納之儀組替無之様取計之事																					

49	堤川除御普請 并新田等之部	4503	利根川等本堤外江小土手築立間敷之事					○	○							154
50	宗旨之部	4566	代官所初而改派押伺書差出方心得之事													
51	風俗之部 ほか5触	4582	成田山不動開帳江戸着之出迎規制之事	△												155
		4583	拾五ヶ所之外寄場渡世差止之事	○												156
		4584	開帳入仏之節大造之出迎制禁之事	○												157
		4586	神仏開帳之節大造之造物等制禁之事	○												158
		4587	木魚講等開帳出迎并葬送ニ付規制之事	○												159
		4589	入墨制禁之事	○												160
		4590	葬礼仏事大造之執行制禁之事	○												161
		4591	髪結床手数掛候障子簾等差止之事	○												162
		4592	風俗ニ拘候灸治渡世之看板差止之事	△												163
		4593	女師匠男之稽古無用并名弘メ規制之事	○												164
		4594	日覆船平常簾卷揚置候様可致之事	○												165
		4595	出銭申掛等致候山伏体之者取締之事	○												166
		4596	手遊之内不行儀之品差止之事	○												167
		4597	土弓場取締之事	○												168
		4599	寺社境内寄場香具土弓場等取締之事	○												169
		4600	葭簀張水茶屋等願不致分取払之事	○												170
		4602	髪結床妻ニ手伝為致候儀差止之事	○												171
		4603	水あびせねだり制禁并火之用心之事	○												172
52	祭礼之部 ほか1触	4643	初午神事之節火之元華美之儀等取締之事	○												173
		4644	山王祭礼附祭入用差出方之事	○												174
		4645	祭礼之踊子等高価之衣類着用制禁之事	△												175
		4646	山王祭礼之節町入用減方可心掛之事	○												176
		4647	祭礼町々出し江附候書附札之事	○												177
53	隠売女之部 ほか1触	4670	隠売女渡世之者商売替等取計方之事	○				○	○							178
		4671	隠売女奉公住替等ニ付新吉原町名主共江被仰渡之事	○												179
		4672	隠売女正路之渡世替名主共世話之事	○												180
		4673	親元等江引渡候売女共取締之事	○												181
54	花火之部 ほか1触	4689	花火ニ付代銀其外鍵屋玉屋江達之事	○												182
		4689	子供翫用竹花火制禁之事	○												183
55	鉄炮之部	4697	徒党為取鎮鉄炮証文江書加候文言之事													



56	曆書其外書籍 并板行等之部 *ほか2触	4708	錦絵并合巻と唱候絵草紙等取締之事	○	○										184
		4709	差留之絵柄有之団扇売買致間敷之事	○											185
		4710	新規出版物取締方之事	○	○		○	○							186
		4711	文学之儀ニ付諸家蔵板可心掛之事				○	○							187
		4712	医書新板之節医学館江草稿差出之事	○			○								188
		4713	風俗ニ拘候ニ付人情本売買停止之事	△											189
		4714	新規活字板も於学問所改之事	○	○		○	○							190
		4715	新曆頒行之事	○	○		○	○	○	○					191
		4716	曆屋拾壹人之外曆類板行制禁之事	○											192
		4717	風俗取締ニ付絵双紙懸名主心得之事	○											193
		4717	風俗取締ニ付絵双紙懸名主心得之事	○											194
		4718	絵草紙屋共商売方ニ付心得之事	○											195
57	奉公人并請人 等之部	4719	問屋仲間差止ニ付書物調伺差出方之事	○											196
		4733	人宿心得之事	○			○								197
58	能狂言芝居之 部 *ほか9触	4749	両芝居等引移ニ付被下候替地之事	○											198
		4751	堺町葺屋町替地町名唱方之事	○											199
		4752	堺町地主等江替地并御手当被下之事	△											200
		4752	芝居座等江地面貸置候堺町地主等江替地并御手当被下之事	△											201
		4752	場所替ニ付狂言座操座江地所被下之事	○											202
		4753	猿若町上納地請負望之者入札之事	△											203
		4755	旅稼之歌舞伎役者共抱入間敷之事	○	○	○	○		○	○	○	○			204
		4756	族役者取締方之事	○											205
		4757	猿若町番屋火消人足等ニ付心得之事	○											206
		4758	能狂言師心得違致候ニ付申渡之事				○	○							207
		4759	木挽町狂言座茶屋等猿若町江引移之事	○											208
59	無宿物もらい 非人等之部 *	4767	無宿野非人旧里江帰郷其外取計方之事	○	○		○	○							209
60	施薬其外養生 所等都而御救 筋之部	4778	医学館施薬願手重ニ無之様取計之事	○											210
61	御堀并塵芥捨 場之部	4804	仲間組合停止ニ付御堀浮芥浚請負人江申渡之事	○											211
62	御仕置者之儀 ニ付被仰渡之 部 *ほか6触	4818	囚人月代摘候髮結牢屋敷雇ニ改正之事	○											212

		4879	孝心ニ付文蔵等御褒美之事		○								213
		4880	諸色直下等の御趣意守候ニ付伊兵衛 御褒美之事		○								214
		4882	厚御主意守候ニ付治兵衛等御褒美之 事		○								215
		4883	諸色直下之御趣意守候ニ付徳左衛門 等御褒美之事		○								216
		4884	禁制之品取上申出候名主御誉之事		○								217
		4885	孝心ニ付宗三郎御褒美之事		○								218
		4885	孝心ニ付政右衛門等御褒美之事		○								219
		4886	孝心ニ付きん御褒美之事		○								220
		4887	類焼之者江米差遣候ニ付重郎兵衛御 褒美之事		○								221
		4888	孝心ニ付かつ御褒美之事		○								222
		4889	諸色直下之御趣意守候ニ付三郎兵衛 御誉之事		○								223
		4890	町入用削減ニ付長八等御褒美之事		○								224
		4891	孝心ニ付鐘五郎御褒美之事		○								225
		4892	賭致候店子捕押訴出候ニ付利助御誉 之事		○								226
		4893	忠義ニ付幸五郎御褒美之事		○								227
		4893	孝心ニ付つる御褒美之事		○								228
		4893	孝心ニ付栄吉御褒美之事		○								229
		4893	孝心ニ付とよ御褒美之事		○								230
		4894	孝心ニ付重吉御褒美之事		○								231
		4895	忠義ニ付忠兵衛御褒美之事		○								232
		4896	忠義ニ付次郎助御褒美之事		○								233
		4897	孝心ニ付勇次郎等御褒美之事		○								234
		4898	忠義ニ付九郎兵衛御褒美之事		○								235
		4899	自身番屋江差入ニ付八兵衛等御誉之 事		△								236
		4900	市中取締諸色掛出精勤候名主苗字差 免等之事		○								237
		4901	孝心ニ付つね御褒美之事		○								238
		4902	孝心ニ付文蔵御褒美之事		○								239
		4903	慈悲心懸候ニ付治郎兵衛等御褒美之 事		○								240
		4904	孝心ニ付つね御褒美之事		○								241
		4907	番屋入用差出ニ付長右衛門御褒美之 事		○								242
		4949	訴訟公事人共遅刻致間敷等之事		▽								243
		4950	御用向之節名主代理人差出方心得之 事		○								244
		4951	訴訟公事人共遅刻致間敷等之事		○								245
		4953	金銀貸借利足引下之事		○	○	○	○	○				246
		4955	金主共安心致貸出候様名主可論之事			○		○	○				247
		4956	貸金銀利足引下ニ付質物利足引下之 事		○								248
		4957	利下後質屋共質物取扱等閑ニ付達之 事		○								249

65	博奕之部 * ほか1触	5007	武士屋敷ニ而博奕等制禁并召捕方之事					○	○	○				250
		5008	富興行不残差留之事		○									251
		5009	武士屋敷ニ而博奕等制禁并召捕方之事		○			○	○	○				252
		5010	於辻々宝引等博奕ヶ間敷儀制禁之事		○									253
66	かたり事等之部	5066	中間共錢さし押売致間敷之事		○			○	○					254
		5067	町家より金銀奪取候偽役人召捕方之事		○									255
		5068	偽役人召捕方ニ付町方心得之事		○									256
		5069	家財改之偽役人召捕之事		▽									257
67	軍艦廻船并川船等之部 * ほか1触	5122	上方より積取候注文荷物海上難破之節損失取計方之事		○	○								258
		5123	異国船似寄之帆立方并沖合航海停止之事		○	○	○	○	○					259
68	海防之部 * ほか2触	5191	異国船取計方改正ニ付警衛向取調之事					○	○					260
		5192	異国船取計方改正ニ付防禦筋用意之事					○	○					261
69	琉球人参府之部 * ほか6触	6020	琉球人参府ニ付見物等取締方心得之事		○									262
		6021	琉球人参府ニ付町々心得之事		△									263
70	異国船応接之部	6033	異国船無二念打払停止薪水等給与之事		○		○	○	○					264
		6034	異国船取扱方改正ニ付浦々建札之事		○	○		○	○					265
71	雑之部	6515	町触之趣嚴重ニ可心得之事		○									266

453

5 210 40 10 76 71 10 7 4 3

\* △は、「幕末集成」の「法文と字句・発令年月に著しい差異のあるもの、もしくは関連ある条項である。」（『江戸町触集成 第14巻』塙書房、2000年、凡例）

\*\* ▽は、対校本の全文である（『江戸町触集成 第14巻』塙書房、2000年、凡例）。

（やまだ よういち 共同研究員）  
（二〇一八年十月一日受理）